

余呉の天神

梅原 達治

はじめに

余呉の海は琵琶湖の北にある周囲八・四五キロメートルの小さな湖で、近世初めには羽柴秀吉が柴田勝家と覇権を賭けて争った古戦場賤ヶ岳もその湖畔にある。この湖の北側の村、川並の渚に一本の楊樹が湖にその影を映している。その楊の木をめぐり古くから一篇の物語が伝えられている。まずその梗概を『滋賀県百科事典』に見ることしよう。

菅山寺と菅原道真 菅原道真が幼時菅山寺に入山し尊元阿闍梨に師事し、一一歳のとき菅原是善卿につれられ京都にのぼったと伝えられるが、史実は不詳。菅山寺にはこんな伝説ものこっている。余呉湖畔の川並に都の落人桐畑太夫がすんでいた。ある日、余呉湖にまいおりた天女の羽衣をかくし、妻とした。二人の間には一人の男子が生まれたが、妻は羽衣をさがしだし、ふたたび天にかえってしまった。あとにのこされた母なき稚児を哀れに思った菅山寺の僧が、寺につれかえり養育した。これがのちの菅原道真であるという。これは菅山寺の天神信仰と余呉湖の天女伝説がむすびついて生まれた伝説だろう。道真をしたって今も山路をふみわけ菅山寺に参拝する人が多い。(白崎、一八二頁)

さて、本稿はそこに提示された新しい伝説の出現にたいしてとくに新しい仮説を提出するものではない。ただ、滋賀県の歴史や民俗を一瞥するとき、そこには余呉の菅神伝説を育んだ近江の風土をひしひしと感じ、尽きせぬ興味が湧いてくる。本稿は、湖北の伝説の周辺の状況や関連のある歴史的背景を列挙する。このことにより、より立体的にこの伝説を眺めることが可能になればこれに過ぎる喜びはない。

なお、本稿の作成にあたって、滋賀県伊香郡余呉町教育委員会の教育長桐畑長雄氏と白崎金三氏、敦賀市の坪田嘉奈弥氏、同金前寺の豊岡弘尚住職、清水市の矢部徹氏、立命館大学社会学

部の新田光子氏、阿南市の新居文子氏など多くの方々の御協力にたいして深い感謝の意を表するものである。

資料

余呉町

余呉町は滋賀県の北端の伊香郡の北部を占め西南は西浅井町、東南は木之本町、西は福井県敦賀市、北東は同県南条郡今庄町、東は岐阜県揖斐郡久瀬村に接した山村の趣を呈している。滋賀県、すなわち、近江国は京織に隣接する地域であり、大陸文化が日本海を経由して輸入されるとき重要な通路の一つであった。また菅原道真は寛平七年、近江守に兼任されており、菅山寺に重大な関与があつたことは考慮するに足りよう。この町内の南端にある余呉湖畔の柳樹に天女伝承が定着し、それに菅神信仰とが融合して現在の伝承が形成されたとの見解に変わるもの、あるいは重大な疑念というものは見出せなかつた。この二つの骨格をなっている伝承や信仰を結びつける要素もとくに見出すことはできなかった。

ただ、ここで注目したいことは、桐畑太夫の娘、菊石姫が祈雨の対象とされており、天神も雷神として、農耕神として崇められる一面があるということである。天神は天人と同音であり、天女と結びつけられる可能性はあろう。この点についての考察は別稿にゆずりたい。

余呉町の天女Ⅱ菅公伝承を詳細に眺めると、幽霊鮎、一つ目の魚、沈んだ鐘など多くの伝承の要素がこの伝承体系に吸収・統合されたことが推測される。以下の資料はその理解をたすけるものとなれば幸である。

滋賀県伊香郡余吾町

坂口

菅山寺

『近江国輿地志略』卷之九十（芦田、六三〇〇～三〇一頁）

○坂口村

○菅山寺 坂口村より拾八町奥の山にあり。大箕村よりは八町あるなり。大箕、坂口両村の間にある山寺なり。大箕山菅山寺と号す。真言宗也。寺領五十石。緑（まま）起曰、近江国大箕山菅

山寺は、人皇三十七代孝徳天皇の御宇当山の嶺より金色の光夜々天に耀の由、叡聞に達し、勅使を立賜ふ。勅使攀登れば、一人の化翁両国箇の獼猴山路の知べをなし分登れば、嵩岫奇霊の池水湛々として青天瑠璃を涵せり。両童忽然として見て勅使に語て曰、此山は是仏法浄清の霊地不動薩埵の所住也。精舎を建立して帰依渴仰し給はゞ、玉体安穩群臣堅固にして、風雨時に順し、蒼生健康ならん。然らば則法燈永く慈尊三会の暁に至て所絶なし、王道久しく日月俱に増榮すべしと。勅使殊勝膽に銘し帰て奏聞あれば、天氣斜ならず叡感あつて、蕭寺を御建立の御願を立給ふ。然るに又人皇四十六代孝謙天皇の御宇明王種々の奇瑞を託し玉ふ時に、照檀上人勅承て天平宝字八年(七六四)に草創せり。本尊は前に孝徳天皇の御宇に神通の光に乗じて、薩摩国に渡来してましませしが、此の上人不思議の御告を得て当山に安置す。阿遮深秘の尊像毘首羯磨の彫像なり。

鎮守は是熊野吉野山王権現なり。時に人皇五十九代宇多天皇の御宇寛平元年(八八九)勅使として、菅丞相中興の修造を加へらる。伽藍薨をならべ、層塔鐘樓雲に聳へ、塔には五智如来を安置す。寺門は三学を象て三院を彰す。都率の内院を表して七々の坊舎を建。開基上人初住の寺院歴然として絶ず。廟上の印塔年を経て相残れり。伝法秘密の院室を威徳院と号し。菅相寄宿の坊舎を信寂坊といふ。西坂二拾四町の麓に金剛力士の樓門を建て、菅相自筆の額を掲。前は龍頭山大箕寺と称す。菅相改て大箕山菅山寺と号し給ふ。又人皇六十二代村上天皇の御宇天曆九年(九五五)白山嶮峯妙理権現天満天神を勧請し、上の三社に合して五所権現とす。勧相自作の像軀、自筆の一乗妙典八軸開次の二経、自愛漢竹の横笛、御劍等靈宝皆此金櫃に納。経蔵は是人皇八十九代龜山院御宇專曉上人萬里の風波を凌て入唐す。人皇九十代後宇多院の御宇宋朝より渡す処の七千余卷の経是を収む。法宝蔵の額は子昂が筆跡也。彼上人は是大威徳の変化也。故に牛を飛て自在を得る。上人遷化の後彼牛西坂の半途に到て、其形岩と化して今にあり。陰明門院五部の大乘經を書写して此経蔵に収む。女院は是人皇八十七代後嵯峨院の後妃也。池は是自然の霊池にして底際をしらず。故に弘法大師美女龍王を勧請して、炎旱疾苦を救ひ、龍宮請雨の功驗を顕せし明池也。島には弁才天女を勧請す。当寺は是忝も三代聖主の御願所也。代々の綸旨院宣其数しれず。三公卿相の請祈は計にいとまあらず。仍て粗記する所の縁起件の如しと云。

『角川』(角川、二五・八五五頁)

真言宗豊山派。山号は大箕山。北国街道(国道三六五号)坂口集落が登り口本道となっているが、創建時代は旧北国道丹生川筋大見集落のほうが本道とみられ、寺号も竜頭山大箕寺と称し、興福寺門法相宗とつたわる。元龜二年(一五七二)の縁起書によると、開基は天平宝宇八年(七六四)昭

檀上人で、寛平元年（八八九）勅使菅丞相によつて堂宇をはじめ、五智如来、阿遮羅明王、白山権現、天満大神を修復建立し、三院四九坊を開く。後嵯峨天皇妃陰明門院入山もあつた。中興に専暁上人が入唐して宋版一切経ほか仏像、法具をもちかえる。慶長二年（一五九七）に石田三成は三〇石を寄進。寛永年間（二六二四～四四）専秀が坊舎を改修。慶長一八年（二六一三）徳川家康の所望により一切経は芝増上寺に寄進され、現在国宝となつてゐる。建治三年（一二七七）鑄造梵鐘、十一面觀音像、狛犬石灯籠のほか古文書を多く残している。（今井清右エ門、一八二頁）

「菅山寺と菅公伝説」 仏教文化の伝播も早く、坂口の山中にある大箕山菅山寺は、「興福寺官務牒疏」によると、天平宝字八年（七二六）比叡の開基であり、寛平元年菅原道真が再興し、それまで竜頭山大箕寺と称したのを大箕山菅山寺と改めたという。寺鐘は建治三年（一二七七）河内の鐘大工丹治国則の作で、その刻銘に「本願聖靈菅大相国、精舎を当山に建立し明王を安置す」とあり、菅公伝説の古いことを示している。往時楼門をはじめ如法経堂三院四九坊が輪奐の美を競つたというが、今日では老樹に蔽われた広い境内に残る本坊・鎮守天満宮・如法経堂・鐘楼・楼門の一部などに面影を偲ぶのみである。後嵯峨天皇妃陰明門院が当山に帰依し、寛元元年（一二四三）この地で没した。今も境内に妃と白子皇子の墓と伝える二基の石塔がある。当寺中興の専暁は大見の出身で、文永年間（一二六四～二七五）渡宋し、建治元年（一二七五）宋版一切経七、〇〇〇余巻を携え帰山した。後、この一切経は徳川家康の懇請により江戸芝増上寺に納められ、明治に至り国宝に指定された。

「菅山寺と菅原道真」 菅原道真が幼時菅山寺に入山し尊元阿闍梨に師事し、一一歳のとき菅原是善卿につれられ京都にのぼつたとつたえられるが、史実は不詳。菅山寺にはこんな伝説も残つてゐる。余呉湖畔の川並に都の落人桐畑太夫がすんでいた。ある日、余呉湖にまいおりた天女の羽衣をかくし、妻とした。二人の間には一人の男子が生まれたが、妻は羽衣をさがしだし、ふたたび天にかえつてしまった。あとにのこされた母なき稚児を哀れに思つた菅山寺の僧が、寺につれかえり養育した。これがのちの菅原道真であるという。これは菅山寺の天神信仰と余呉湖の天女伝説がむすびついて生まれた伝説だろう。道真を慕つて今も山路をふみわけて菅山寺に参拝する人が多い。（白崎金三、一八二頁）

銅鐘（余呉町教委、文化財専門委、三頁）左の銘が刻まれている。

近江國伊香郡有式靈窟尤是称美是故本願聖靈菅大相国建立精舎於當安置明王於本尊自以降年紀

懇矣靈驗炳然繁昌無窮故滿徒等廣為救群生改薄少推鐘成洪声之青腰及音響於十方普利益於九界仍所鑄如件

建治三年丁五月八日一山衆徒

大工右馬允丹治国則

参詣のしおり 大箕山菅山寺(真言宗豊山派) 近江天満宮

菅公お手植ケヤキ 山門の左右にあり、樹令一千年余りといわれ県の名木に指定

朱雀池 菅公姿見石

『帝王編年記』養老七年(七二三)の条 古老傳曰。近江國伊香郡与胡郷伊香小江在郷南成。天之八女。俱為白鳥自天而降浴於江之南津。干時伊香刀美在於西山遙見白鳥。其形奇異。因疑若是神人乎。往見之。實是神人也。於是。伊香刀美即生感愛。不得還去。竊遣白犬盜取天衣。得隱弟衣。天女乃知。其兄七人飛昇天上。其弟一人不得飛去。天路永塞。即為地民。天女浴浦。今謂神浦是也。伊香刀美与天女弟女共為室家。居於此処。遂生男女。男二女二。兄名意美志留(おみしる)。弟名那志等美(なしとみ)。女名伊是理比売(いぜりひめ)。次名奈是理比売(なぜりひめ)。此伊香連井寺之先祖是也。母即搜取天羽衣。着而昇天。伊香刀美独守空床。口金詠不断。(黑板、一四八頁)

余呉の湖来つゝなれけん乙女子が 天の羽衣干つらんやは 菅原是善(鏡岡、一一一頁)

『雑話集』むかし 近江国余呉の湖に織女(たなばた)の下りて、水あみけるに 桐畑太夫という男行あいて、ぬぎ置る天衣をとりたわむれば たなばたへ帰りのぼらで やがて其男の妻に成りて居給ひにけり 子どもうみて としごろになりけれど 天上へのぼらん ころざし失ずして 常はねをのみなきけるに 此男ものへまかりたるに 其間に此子父のかくし置たる天衣を取りて あたへければ 女よろこびて それをきて飛上りにけり この子に契りたるへと 我わかゝる身にてあれば おぼろにてはあふまじ 七月七日是に下りて 此湖の水をあふべし 其日にならば あい待(まま)べしとて 別の泪をなん流しける 偕其子孫今まで有りなん申伝たり (鏡岡、一一二頁)

『木曾路名所図会』(林、三〇七、三〇八頁)

余湖海 (伊香郡にあり。東西二十町、南北三十町、北の峯よりの滴り集まりて湖となる。尾

上川に流れて、余水琵琶湖に入る)

『夫木』

寒まざる伊吹が嶽の山風に氷はてたる余吾の内湖 俊頼

同

衣手によごの浦風さへさへてこたかみ山に雪ふりにけり 頼綱

『曾丹集』

よごのうみきつつなれけんをとめ子が天の羽衣ほしつらんやは

諺に云ふ、北野天神はこの天女の御子なりといへり。これによつて余吾の渚に天神の御やしる勸請して今にありとなん。

『大日本地誌大系』 この湖の主は大いなる緋鯉なりと称せらる。この大魚は時に黒雲を起し竜となりて天上し、或はまた嬋娼阿娜たる美人となりて湖辺を逍遙することあり、而してこの湖水の深きこと殆んどその底を知らず、むかし湖辺の一漁村川並に漁夫桐畑太夫といえるがあり。一日大鯉を獲んとして湖上に船を浮ぶ。須臾にして三尺に余る金鱗目眩き一尾の鯉魚を獲たり、太夫はこの獲物を村人に誇らんと欲し帰路に就きたりしが、大魚の重きため、網に巻きたる鯉を路傍に置いて休息したり。暫くにして網を見るに大魚既に無し。太夫は唯茫然として自失せるのみなり。此時馥郁たる香の風に送らるゝあり。太夫芳香を慕ひてとある一柳樹の下に歩みよりしに、樹上に五彩の色鮮かなる輕羅の懸れるを見る。即ち柳樹を攀ぢて衣を得網に巻きて帰る。行くこと数歩にして後を顧れば一人の美女悄然として佇立するあり、曰く「妾は天国のものなり、余呉の湖の美景に憧憬れて毎年一度この湖水に降り浴す。今日はその日に当れるを以て天上より来り、衣を柳樹に懸けて水に浴せり。然るに陽も漸く西に傾きければ羽衣を着けて天上に帰らんとするに衣なし。乞う網の中なる衣を返し給え」と。太夫衣を隠して返さず。美女、太夫と衣を巻ける網を奪わんとし奪わせじと争ふこと少時、美女遂に力つきて地上に倒れ伏しぬ。稍ありて涙を拭い「今は天上に帰らんに由なし、さりとて寄る辺なき身を奈何せん、乞う君がために箕箒の妾たらん」と。太夫喜ぶこと限りなく相伴いて家に帰りぬ。

かくて美女は天上に帰ることを断念し、太夫の妻となりしも、華麗なる天上界の事のみ偲ばれて、人知れず涙のうちに日を送りしが、やがて懷妊し次の年、玉のようなる一男を挙げたり、一日この乳児の泣くこと甚しかりしが、あやなす子守の高らかに

いましの母は天女様 お星の国の天女様 いましの母の羽衣は 千束千把の藁の下

と歌うを聴きし彼の美女は、はつとばかりに心に悟る所ありけん、独りうなづき、裏庭に堆かく積める件の藁の下をさがし求めしに、果せる哉常日頃しばらくの間も忘れ得ぬ、彼の羽衣の出でしかば。飛び立つばかりに喜びて、直ちにこれを身に纏ひ忽にして大空高く舞いあがり、天上遠く飛び去りぬ。時にこの湖に程近き菅山寺真寂坊の僧導元阿闍梨、偶ま托鉢してこの地に来りしが、一伍一什の話をきゝて、母なき稚児の身を憫み、携え帰り養育したり。この稚児後に菅原是善郷(まま)に養われ子となる。千古の学聖菅相公即ちこれなり。(鏡岡、一―一二―一三頁)

余呉の羽衣 昔、余呉のほとりに伊香刀美という男が住んでいた。ある春の日、湖の水が静かに漣をたてている朝、湖辺を通ると天より白い鳥が舞い降りた。ところが白い鳥はやがて乙女の姿になってゆあゆみをしはじめた。刀美はうつかりみとれていたが、ふと気がつくとき岸の松の枝に裳が揺れていた。これはきつと羽衣というものに違いないと思い、それを持ち帰るのであった。羽衣をなくした天女は湖辺で泣いた。けれども刀美は羽衣を返さないばかりか、天女をわが家に連れて帰ってしまった。天女はしかたなく刀美の妻になった。それから三年目、唐櫃にしまつてあった羽衣をみつけた妻は、すぐにこれを身にまとい、たちまち白い鳥となって、空に舞い上がり姿を消した。残された刀美とその子たちは、母の天女をしのんだが、ついに二度と会うことはなかった(伊香郡)。(橋本、二七六頁)

△雷神と余呉湖

昔、近江伊香郡余呉に、一人の樵夫があつた。一日、山に入つて、雷神に会ひ、雨壺を托されて天に昇り、彼の壺から少しづつ雨を降らせてゐたが、はからずも、自分の村が水に不足してゐることを思ひ出し、その上で壺を傾けて雷神と分れ、村に帰つて見たら湖と為つてしまつた(淡海温故録巻四)。(郷土趣味同巻同号所載) (八二頁)

『桐畑太夫之縁起』(川並桐畑家所蔵) 奥尋由来此処之湖水外入無水而太清三面有山春桜梅華之移水色系秋諸木紅葉而朝日夕日難尽詞故平都大内落人斯所留 湖水二町余西桐畑口云所構居家數有居住号名桐畑太夫天(夫?)姿位風越尋常之人然山中之居住數多之下人被為勉農業其後弘仁二年(八一二)之春暮太夫最愛一人生女子 是名曰菊石姫其子尋常之人替有親之慈悲寵愛而被置七八歳

成次第身体蛇形太夫此屋可置者不有屋敷一町余東北屋賀原云所仮屋立被捨置朝夕之食物不宛給菊石守立下女深哀痛敷事哉(哉?)我当前食物別与為養育焉十八九歲成斯不有者終湖水入其時長云下女養育何以可報己我目玉片眼引竜目玉宝金難求大切致下女被与下女君臣一世別同前歎有余人並不成人無是非泣別志給者肩身(形見)思大切為置此目玉時疫瘡病除事甚其外色々有妙然此處事無誰告達上聞則以上使可差上被仰渡下女惜隱上意嚴故無是非差上御上覽有竜眼也而眼共持參可致被仰依去右之訳悉細申上然共隱置強有御吟味難絶難儀成暫待可被下直湖水西新羅森自岸高声而菊石姬云々為呼然処湖水俄波荒成是如何思処自冲方水左右別髮乱浜辺方来流石下女驚菊石姬下女向有如何呼被尋其時下女乍汨右之訳云々上誠而眼不差上而者我火水成敗可逢何卒而眼共給泣々云菊石暫無詞若時養育広大恩也予而眼為抜命無相違其方命果目玉可取而眼共遣予闇同前時刻不知者湖水四方堂建立時可撞鐘太夫此由告給云自目玉引抜石被投付此石掘入鮮有跡此石名目之玉石云新羅森北方有岸其側長三尺余横一尺斗之石有是蛇枕良久被居然後向下女云今後不可予呼若予有逢度事此石可見云終其形不見焉此石云蛇枕偕右目玉地頭差上下女無難助焉菊石母此事自聞病之床付無程空成焉則居屋敷一町斗南方葬高所斯後太夫心哀菊石事案下女七森云送下女力不及太夫自堂被建立先新羅森側一社三町余北上野森亦東北蓮法寺二町南智者寺亦三町余有加子森五町斗南黑森亦五町南黑山一社含七森鐘樓造時為撞菊石成主無而眼故此湖水回暗名海水清皓清天自其時不見底其後太夫朝夕寂然余不心宜故或時登山道遙而被晴積鬱亦或時浮舟遊湖水其日西傾正欲還時俄自虚空花降音樂聞幽異香太薰太夫不心得何事成天地四方見廻共無別俄有暫北方浜辺美女一人現水中是如何者哉子細可見渡遙隔而舟漕寄供人退只一人木影見給其美宛不異花笑貌太夫心初々敷詠被居然所側柳枝有懸者動風伸手取得見如蟬之羽輕々敷薄衣有名香薰是希代者哉懷中而被居時久有美女水中上右有衣柳之木行枝見廻梢見上誠物尋氣色木之近所逍遙斯所太夫悠然而出曰夫御身何方人渡給有美女驚顏色無詞良有云予此所不有住者天女也予以此湖水清每年一般浴此江然今失羽衣故不能帰天公若羽衣不知給矣(△)太夫之曰我左様之物有夫知天女其場座嗟平(乎)悲哉不還天可致如何矣泣濡頓而太夫之取袂公有不知斯在上正取給覽哀思右予返給泣々云太夫之曰疑多事哉最前云通我曾以不存左程難儀我宿所可伴右替之着衣誘被還然共天人終日默故太夫色々成遊宴更無勇氣色只不還天事而已案飛行見鳥思還空光詠月増思帰實無是非太夫家被居此有縁之端哉終有夫婦契約果睡斯而歷春過秋内此承和十二年成其八月朔日一人生男子其子天姿美麗而夫婦之寵愛他人敬愛之期後太夫心解物語曰羽衣久敷納箱若為損出可示少開箱晒置清天妻女見之是予羽也曰此叶念願得還天時戴懸身忽飛行自在成身虚空上流石幼雅男息愛情難捨庭木末下清音云予德羽衣故菟角可還天殘置雅子随分能育給予此

未可守云捨雲井遙昇焉太夫大驚天見上飽果而只杳然人心地莫焉斯而十七日過夜夢件之天女來太夫告而曰公是迫夫婦之契雖不淺有地者下官故何卒還天度思不凶羽衣入手此度還天也若公昇天有望三千數之埋皮其上荀云草植給叶望時一夜屈天有時夫付而可給昇云終夢覺太夫不審不晴起上而見廻共不見其形是心懸也去來可例而見調皮被植荀不思儀哉其草一夜虛空延上偕教之通リ無違其昇天給其時三歲成稚子岩之上被捨置流石有德之人仰哉其子之泣声経文有響菅山寺真寂坊阿闍梨尊元和尚聞別給有不思議也以人被尋果而其子泣居衰成哉忽抱上寺帰焉右の岩名曰泣岩湖水六七町北西方有伝尊元和尚見童子清形是不有唯人喜寵愛兒撫育給五歳春鶯声歌其後菅原是善郷欲登菅嶺先余呉之湖水望見則歌云

余呉の湖来つゝなれけん乙女子が

天の羽衣干つらんやは

田子の浦にきつゝ馴れるけむ少女子が天の羽衣さ干すらむやぞ（国民図書、三八頁）

夫登菅山寺有留宿太夫之童子見給其美麗成秀人是善郷尊元云承之為養子都伴帰給次第随成長増明德十一歳春初而作五言詩云

月耀如清雪梅花似照星 可憐金鏡軀庭上玉房馨

夫段々官位進階終天満大自在天神四海名耀名給者比君也云々

■承味十四年

眩嘉二巳酉卯月上旬在塩中隠寮書写也

注承味十四年は承和十四年の誤り 眩嘉二とあるは一八四九嘉江永二年巳酉年陰曆四月上旬の意と思われる。（鏡岡、一五〇七頁）

余呉湖以外の天女伝説（鏡岡、一八〇一九頁）

一 三保の松原の伝説 神社考 卷五

二 天川の羽衣伝説 河内国名所図会

三 比治里真井の奈具天女伝説 丹後風土記

四 綱田妙見天女の伝説 久留里記

五 土佐国幡多郡竜串の奇勝天人の舞台石

六 下総国千葉町の羽衣池畔の羽衣松

七 陸前国遠田郡の天女墳

八琉球の「銘刈子」伝説

ふる里の神社と祭神（鏡岡、二一五～二二頁）

坂口（七社） 意波閑神社 菅原神社 近江天満宮 下余呉（五社） 平彌神社 川並（四

社） 北野神社 新羅崎神社※ 八戸（二社） 八幡神社 中之郷（一〇社） 鉛練比古神社 北野

神社 大水別神社 天満社（西天神） 下丹生（三社） 丹生神社 上丹生（六社） 丹生神社 摺

墨（二社） 菅並（二社） 六所神社 小原（二社） 田戸（一社） 奥川並（二社） 鷺見（三社） 尾羽

梨（二社） 針川（二社） 東野（八社） 国安（四社） 草岡神社 文室（四社） 北野神社 今市（一

社） 佐毛味神社 池原（六社） 大水分神社 大浴神社 小谷（二社） 柳ヶ瀬（二社） 椿坂（一

社） 中河内（三社） 半明（一社）

注 式内社 滋賀県内に一五五座内伊香郡内に三六座

御礼踊（神おろし）（鏡岡、二一六九頁）

踊よ踊よ 御れい踊を踊ろよ踊ろよ

有がたや有がたや 御山王様の御手柄で

御天神様の御手柄で 池谷の竜神様の

御手柄で みな神々のお手柄で

充分うるおいされて 万の作りが

色を出す それで氏がよろこんで

御礼踊をまいらる

末ははるかにながけれど

御踊は是までよ 御礼踊は是までよ

大字川並に残る、余呉湖の雨乞踊唄（鏡岡、二一六九～七〇頁）

伝説の豊富な余呉湖には昔の、雨乞踊の唄も、数多くあったようである、特に新羅崎の森にあ
って、新羅崎神社には、桐畑太夫の娘菊石姫が、早魃に困る人達を見かね、雨を祈り湖中に入っ
た、伝説による、蛇の枕石などがあり、雨乞の風習があった。然し桐畑義雄さんの話によると、

明治十六年（一八八三）、今より九十年前、当時八月八日の雨乞踊が最後の踊であったと記録されており、今より五十余年前、当時のリーグ級の老人に聞き写したものを、更に写させてもらったのが次の唄である。現在では七十以上の古老が、わずかに知っているだけだそうだ。

名 木 踊

天神様の名木は

石なぎ浜の衣柳よ

母の羽衣かけし木は

常に大切、限りなし

母御の生来を、たずぬるに

或時天女が天下り

柳に羽衣 かけ置いて

湖に其の身を冷しけり

そのまに 羽衣陰されて

それ故天には帰られず

桐畑太夫の妻となりて

思わぬ月日を送りける

三年に余る其の内に

幼子一人 誕生あり

其のまに、羽衣きゝ出し

それにて天に帰られる

年に一度は 七夕祭り

二年に再び逢いましょ

それでならずば 荀を植えて

それにて 天上なさるべし

妻の教えは皮を集め

三千枚の皮を土に

植えた 荀が一夜にのびて

夢にて 天上なされたり

あとに残る若者を

いたわる 者もなし

されば此の君成人し

菅函相となり給う

日本で 学びの御神と

うけて氏子が うやまい祭る

名木踊りは 是迄よ

江州伊香郡での古い言ひ伝へに、昔郡内の某川に大きな穴が出来て川の水を吸込み、沿岸の農村悉く田の水の欠乏を患ひてゐたとき、井上弾正なる者の娘、志願してその潭に飛込み、蛇体となつて姿を隠すや、忽ち岸崩れて、その穴を埋め、水は豊かに田に流れ入るやうになつた云々。即ち、弟橘媛の物語以来久しく行はるゝ、水の神に美しい生牲を奉つたといふ話の部類ではあるが、なほこの地ではその娘が片目であつたといひ、その故にこの川の鯉には今でも一尾だけは必ず一つしか目がないと言つてゐる。(柳田、五一三六頁)

坂口

意波閑神社 坂口の氏神である。祭神、大鷦鷯命。境内社として菅原神社がある。

菅原神社 祭神、菅原道真公。社宝として、妙典八軸開決の三経、漢竹笛、御剣および道真公師匠信寂坊の画像がある。(東洋大、一〇五頁)

天神講 坂口では、四月二五日と九月二五日の春秋の大祭の時に行なう。(東洋大、一一四頁)

あめを買いにきた幽霊(余吾町教委、一一三〜一一四頁)

坂口の平野さんの家は、むかしから続いてきたあめ屋さんです。このあめ屋さんには、大正の初め頃までは、夜には決してあめを売らないということが堅く守られていました。

それには「あめ買いの幽霊」の伝説が坂口の人の間で信じられていたからです。

この伝説が生まれたのは、ずいぶん昔のことで、いつの頃からか、今では知っている人は誰もありません。

それはある夏の夜のことでした。夏には珍らしく、ひそかに大地にしみとおるような雨が降り

続いていました。時折、山の斜面を生暖たかい風が、サァーと吹きおりてきては、坂口の家々をなでて通り過ぎる夜、のできごとでした。

あめ屋さんでは、家の人がみんな寝静まり、主人一人が帳簿の整理をしていました。その時スーッと店の障子をあける気配がしました。主人が何げなく出てみると、見知らぬ若い女の人が、青白い顔をして入口にそっと立っているのです。

「誰や」

と聞いても、何もいわないで店の棚を指さして、あめをほしそうに手を差出すので、あめを渡してやると、ポイとお金をおいて、音もなく立ち去っていききました。主人は背すじに「ゾオッ」と寒気を感じ、気味わるくなりました。

ところが、次の晩もその次の晩も、人びとが寝静まった頃になると、あの若い女がやってきては、あめを買って帰っていききました。こんなことがいく晩も続くので、一家の者はすっかり気味悪くなり一体どこの人なのかたしかめたいと思いました。

ある夜、そつと主人が後をつけていくと、村はずれの墓地のところで、女の姿はかき消すように見えなくなっていました。主人は一時に恐怖を感じ、逃げて帰りました。

翌日、近所の人たちといっしょに、昨夜の墓地へきて、あらためてよく見ると、真新しい土もりの上に白木の塔婆が立っていました。この塔婆は、隣村の身ごもっていた若い母親が急病で死んだ新墓でした。その土の中から、かすかに赤ん坊の泣き声もれてくるような気がするので、掘り起こしてみると、死人のおなかの赤ん坊はまだ生きていたのです。子を思う母の一心から、死人は乳が出ないので、幽霊となって、毎夜あめを買いに出かけ、あめでわが子を育てていたのです。

(語り手 平野市介 近江のむかし話)

牛岩(余呉町教委、一〇九〜一一〇頁)

坂口から、天満宮の額のかかった鳥居をくぐると、菅山寺への参道は傾斜の急な山路になります。その山路を曲がりくねりながら登って行くと、途中に「牛岩」と書かれた札が立っています。よく見ると、土の中から大きい岩が突き出ているのが目につきます。

この岩のことを、村の人は牛岩といっているのです。そう思ってみると、大きい目をした牛の頭が土の中から首を高く持ちあげ、土の中に埋もれた体を、今にもはい出そうとしているように見えるのです。

この牛岩にはこんな話がいい伝えられています。

菅山寺は古いお寺ですから、むかしからえらい坊さんがたくさん出ました。その中でも専暁という坊さんは、荒海をのり越えて、遠く宋の国に渡り、ここで仏教の修業をおえて、菅山寺に帰ってきました。

専暁は宋の国から帰ってくるとき、宋の国のお経の本七千巻を持って帰り、菅山寺の経堂に納めたのです。むかしのお経の本は大きい字で書いてあるので、七千巻というと大へんかさになります。それに菅山寺は高い山の上にあるので、寺までお経の本を運ぶのは、とても苦労でした。専暁はえらい坊さんなので、山の上の菅山寺に物を運ぶのには、飛牛といって、空とぶ牛をつかっていたといわれています。

お経の本が、宋の国から船で敦賀の港につくと、ここからは牛の背に積まれて、菅山寺に運ばれました。専暁はこの牛をととても可愛がっていました。

その後、専暁は菅山寺を退いて、大見に医王寺を建て、ここで静かに生涯を終わったのです。専暁の死が、この牛にもわかったのか、その時、菅山寺の登山道の中程をあるいていたのが、急に動かなくなり、からだがだんだん硬くなって、とうとう岩になってしまったのだそうです。

山上から流れてきた土砂で、体は埋れてしまいましたが、首から上を土の上に持ちあげ、悲しそうな目をして、菅山寺へお参りする人たちを、じつと見つめているのです。

時が移り、徳川家康が天下をとると、家康は徳川家の菩提寺として、東京芝に増上寺を建てたのです。そうすると菅山寺に、日本で一番立派なお経の本を集めたいと、日本中の寺をさがさせました。そうすると菅山寺に、日本で一番立派なお経の本があることがわかり、是非、増上寺に納めるようにとの達しがありました。菅山寺はしかたなく、これを増上寺に納めました。いま芝の増上寺には菅山寺経本として、重文国宝に指定され、増上寺の宝物となっています。

菅山寺はこのため、徳川幕府から五十石の祿をもらいました。

けれども牛岩は、この経本をおしんでか、また医王寺でなくなつた、主人専暁の死を悼んでか、いまも悲しそうな表情で、土の中から頭を空にむけているのです。

豆木の太鼓(東洋大学、一六七頁)

昔、ある母親が実子と継子に豆を植えさせた。そのとき、継子には炒った豆を、実子には生の豆を植えさせたがどういいうわけか炒った豆のうちの一つから芽が出て大きく成長した。その上部

の木で太鼓を作り菅山寺に納め、下の方の木で臼を作り福井の永平寺に納めた。(坂口平野市介氏)

○川並村 余湖の西の端にある村也。(蘆田、六三〇五―三〇八頁)
川並村申伝書(新関、五三―五四頁)

往古、当村の郷に桐畑太夫という人あり、海中に遊び小島の柳に異衣かゝる、寄りてみれば不思議の衣なり、太夫宿に持ちかえる。美女きたりて問う、君わが衣を持ちきたるか、彼の衣はわが羽衣なり、年の七月朔この水に休みつく、然るに羽衣失いて帰ることを得ずかえし給へというに、我は存ぜず餘の所をたずね見給へという、ぜひなく去る。

また二・三日過ぎて泣く泣くきたりて、われ帰るところなしこの家で養うべしという。

太夫謹んで家にとどめ居ること緩々、年の九月男子を産み太夫敬愛して陰陽丸と名づく、日をへて夫婦となり心静かに住む、明年女子産まれ名を菊石という。

三年すぎて語りていわく、羽衣久しく出さず損失かと言って箱を開き、しもべの小鍋童子に見せしむ、取りて遊ぶ、太夫驚きて怒ればふところに入れて脇へしりぞく、婦、常に心に思いおり、目をしのんで取りて着る、たゞちに虚空へ飛び登る、太夫驚き見て涙を流す、童はなはだしく泣く……。

慶長十七年(一六一二)三月吉日桐畑氏新羅惣太夫、桐畑氏川並兵衛

○天満天神社 川並村にあり。祭る所の神菅丞相の霊なり。神記有縁起と号す。其記に曰、昔斯郷の酋長を名づけて、桐畑太夫といふ。天姿雅麗にして、尋常の人に異也。一日船を泛て釣竿を垂、江水に遊ぶ。日西に傾き帰らんと欲して船を柳下につなぐ。空中に物あつて樹頭に掛れり。手をのべて取得て是を見るに、異香甚薫し、輕羅の珍衣なり。懷にして帰らんとす。忽然として美女老人あらはれ、太夫が袂をひかへて曰。公の懷にする処の衣は、是妾か羽衣なり。予此湖の清きを以て、毎年一たび此江に沐す。妾羽衣なき時は天上に帰る事あたはず。乞是を歸し賜へ。太夫答て曰、我是をしらすといふ。天女なくく請来て曰、妾天に帰るべき由なし。今より後は公が家に婢妾となつて永く箕箒を事とせん、公哀憐をたれ賜へといふ。太夫是をゆるす。明年初秋男子を生。美質端正にして異靈転た多し。夫婦の寵愛他門の愛敬勝て計べからず。一日夫婦相語て曰、羽衣久しく櫃に納て出さず。若くは蠹損もあらんか、出して此晴天に曝さんと。箱を開き衣桁に掛る。妾窃に其間を窺ふ。時に愛童来て天衣をとりて是を破らんとす。太夫是を見て童を携て奥に入。其間に婦女彼衣をとつて身に掛れば、忽飛行自在の身となつて虚空に登る。流石

三年の契り幼稚の男息、情はなれ難く、太夫幼息の手を挙て悲嘆く。時刻暫く移る相見る事あたはず。永き別となる。爰において太夫の年来の念僧菅山寺の真寂坊阿闍梨尊元和尚来て、太夫の家に入て檀度を受。時に幼息出て此和尚に見て、甚睦しきこと旧識のごとし。三日過て尊元帰る。童児随ひ来て同じく寺に入て遊ぶ。性智敏聡にして八耳にひとし。林間の鶯を聞て、歌に曰。

鶯よなせは鳴そ乳やこひし、小鍋や愛し母や恋しき

其後菅原是善公余湖の湖水に遊ぶ歌に曰

余湖海きつゝなれけん乙女子か、天の羽衣ほしつらんやは

桐畑の家に宿留して、次第に菅嶺に登て池水を見、崇敬彌篤し。爰に於て彼少童を見て、其威猛を知て則取て養子となす。年十一歳の時初て五言の詩を作て曰

月耀如晴雲、梅花似照星、可憐金鏡転、庭上玉芳馨、

菅山寺は前は龍頭山大箕寺と云。菅の少将幼稚の時此寺にありて、其懇睦のこと浅からず。故に奏聞を経て四十九坊を建立して、則氏の字を賜り、改て大箕山菅山寺と号する者也。自翰の額、同じく法華經、自身の像軀を作て、永く此山に鎮座して、寺門の繁榮を守るなりと云云。

按ずるに、以上の縁起の説虚偽の甚しき事論するにたらず。然れども其至て甚しきもの解せずんばあるべ(ま)まらず。【雑和集】に此事あり。昔近江国余湖の海に織女下りて、水あみけるに、其所なる男行達て脱置ける天衣を探りければ、織女後天上に帰らず、頓て其男の妻になりて居給ひけり。子を生て年頃に也けれども、天上へ登らんの志失ずして、常にねをのみ泣けるに、此男野辺へまかりたる間に、此子父の隠し置ける天衣を出して、とらせたりければ、女悦びてそれを着て飛上りける。此子にちぎりける事は、我は斯る身にしたあれば、おぼろげにては逢まじ。七月七日にくだりて此海に浴すべし。其日にならば待べしとて、別の泪を流すと云云、然れども此幼児を菅丞相なりといふことは記さず。【雑和集】もとより信ずべき書にあらず。余湖の海きつゝ馴けんをとめ子が、天の羽衣干つらんやは。と詠ぜしも此事を誦る也。歌に詠じ詩に賦せし言の葉も、採用し難き事多し。菅丞相は天より降り玉ふといひ、斯る桐畑太夫が事を設しなるべし。天女とは天に又世界有て、男女など有と思へるは謂にたらず。虚言也。星など降て石となれることは疑ふべからず。天女天人などの降りて、然も妹背の語ひをなせしなどいへるは、腹を鼓して笑ふに絶たり。若実に桐畑太夫といふものありて、斯ることあらば狐狸の妖怪に訛らかされたること疑ひなし。菅丞相は天より降れる人にあらず。菅原系図を考るに、菅原氏は天穗日命より出て、命十二世の孫可美乾飯根命の裔、野見宿禰土師の姓を賜ふ。天応元年(七八二)光仁天皇土師

の姓を改て、菅原の姓を賜ひ、夫より数代相統して、從五位下文章博士是善に至る。是善伴氏を娶て、菅丞相を生り、丞相諱道真、字三、是善の四男也。幼名は阿児と云。母は則伴氏也。【菅神和光伝】には是善の一男とす。【菅家日記】【菅氏深秘記】【菅氏昇進録】【菅氏授衣記】【菅家文章(まま)】等の諸記桐畑太夫が説もなく、天降れりといふ説もなし。承和十二年乙丑に生ると見へたり。【菅家聖廟曆伝】といふ書には、五六歳童子是善が南庭の梅樹の下に天降れるを、是善養て子とすと記せるは、不稽の説用ゆばからず。河内国菅生天神の縁起にも、幼児天より降り。靈童なるを以て都に送る。是善養ふて子とす。菅丞相是なりと。故に菅生の文字を書といふ笑べし。此地の菅並あり。菅浦あり。菅山寺有。爰を以て菅家出生の地とせるは名に迷ふ謬なり。古昔此辺菅家領なるものもろからず。天女羽衣の事は此地のみに限らず、所々にいへる妄言也。駿河国三保松原の天女の事。猿楽者流の羽衣といへる謡曲にあり。人口に膾炙す。丹後国比沼山の頂の井に、天女下りて羽衣を脱、浴せし隙に、羽衣をとられたること。又佐々木大膳大夫天女の水に浴せるに行逢て、羽衣をとり隠し、天女を妻とす。夫より此余流天女の子といふことによつて天子といふ。今は尼子に作るといふ。西土にも斯る偽説ありと見へて、【搜神後記】に余章新喻県の女の毛衣を取隠し妻とせし説。【広輿記】に浴仙池のことを載て記せること。桐畑太夫が事と同じ。和漢同日の妄談なり。嗚呼四海の一天地なることを知つて、天上に世界あつて女も雨露霜雪の如く降らんとおもへるは、けしからぬ惑ひ也。

天神の森(東洋大、一六七頁)

天神の森は、現在羽衣の柳の木があるあたりにあつた。その田の中に旧跡があり、明治二九年三月に現在地に北野神社を移転したと言う石柱が立っている。本殿はそこにあつたもので、文化五年建築したと言うことが明らかである。昔大風が吹いて大木が倒れ、現地に移転したものである。(川並 桐畑義夫氏)

北野神社

川並の氏神である。祭神、菅原道真公。御神体、二五才の道真公の像。社伝によりと寛平二年(八九〇)九月二五日鎮座し、桐畑太夫なる豪族あり其所館の跡小字桐畑と言う当社は、昔時小字砂新田にあり明治二二年(一八八九)小字仏谷にうつすとある。下神主は一年毎に選出し、氏子総代は三名で任期は二年。二人やめる年と一人やめる年があり、二月一日に一番近い日曜日に区の總會で選出する。境内社として新羅崎神社がある。(東洋大、一〇五頁)

天神大祭 一〇月二五日(旧九月二五日) 北野神社の祭り、区の役員、特に氏子総代が中心に

なつて準備する。下神主が宮の飾りつけをする。中之郷から本神主が来て祝詞をあげる。串ダンゴ三本・御神酒を供え、区の役員は公会堂に帰ってきた直会をする。昔は九月一五日頃、北野神社でみくじをひいて宿の家を選び、そこで直会をした。一般の人は神社に参り、そして御神酒を飲んで帰る。(東洋大、六四頁)

新羅崎神社

新羅崎(白木)の森にあったが明治四二年(一九〇九)の神社合併のため現在の北野神社の境内に移された。神主、氏子関係は北野神社と同じ。古来の伝説によると桐畑太夫の一女菊石姫、或年大旱にて農民困苦するを見て一身を奉げて雨を祈り余呉湖に投身し大雨ありて世を救う、村民一祠を建てて姫の霊を祀ると。此祀前の湖中に蛇の枕石と言う石あり姫入水の時将来若し大旱あらば此石に祈れと遺言して投身し此石を枕として終る。依て後世雨乞いの神として大旱には此石に祈るとある。(東洋大、一〇五頁)

大祭 五月二日(旧四月二日) 二〇年前から始まつたもの。部落の代理神主が準備にあたる。中之郷から神主がきて祝詞をあげる。北野神社に幟をたて、供物(御神酒・スルメ・鯉・御洗米・水・塩)をあげる。その後公会堂でおもな参列者(二区の役員)が直会をする。一般の人は神社で御神酒を飲んで帰る。(東洋大、五九頁)

雨乞い(東洋大、一二八～一二九頁)

○水が枯れた時菊石姫に頼むと、余呉湖の附近の田に雨が降ると伝えられたので、雨が降らない時雨乞いをかけるようになった。古文書によると今までに三回の雨乞いが記録されている。すなわち、嘉永六年(一八五三)六月二八日、明治九年(一八七六)八月二日より、明治一六年(一八八三)八月八日よりの三回である。村人は天氣が続くと、総会で雨乞いを決定し、オコナイ組が三日三夜、五日五夜、七日七夜などの日程で行なう。モロトウは斎戒沐浴し、新羅崎神社に籠って祈願をする。また若い衆も一緒に祈願をする。その間は婦人会、親類など村中で餅、酒、魚、菓子などを持って陣中見舞いをする。三日三夜、五日五夜などの時は、若い衆は余呉湖の中にある蛇の枕石を裸になつてかつぎあげて、木の所から天神の森(現在、羽衣の木がある所)に向けて立て、神主が早く雨が降るようにと祈願の祝詞をあげる。祝詞の間は神主も蛇の枕に水をかけて倒す。三日三夜で雨が降らないと、さらに五日五夜にわたつて、二本あつた松の木の所から菅山寺の方角に向けて雨乞いをする。そして食事をしたり酒を飲んだりして賑やかにふるまう一昼夜のことであるから、歌を作つてその歌にあわせて踊る。それが雨乞い歌となつて残つて、その歌

には次のようなものがある。メイボク踊り、雨乞い踊り、ヒメコ踊り、コセキ踊り、アヤメ踊り、七森の踊り、リルビキ踊り、エンラク踊り、松虫踊り、ササラ踊り、テルテノ踊り、シンショウ踊り、タケヤ踊り、鳥籠踊りカマクラ踊り、タイショウ踊り、オリン踊り、暇乞いの踊り。

○白木森 川並村にあり。余湖の西端也。(蘆田、六三〇七頁)

○白木大明神社 白木の森の中にあり。祭る処素盞鳥尊にして、新羅大明神也。新羅の文字志良木と訓す。白木の文字しら木と訓す。訓の同じきを以て、今専ら白木と書。(蘆田、六三〇七頁)

江土(下余呉の小事)

昔話 話者 佃すわ(余呉湖の近く江戸の生まれ)

昔、弁慶が余呉のお宮様の鐘をかついで賤ヶ岳へ上つてある木にくくつた。そして鐘をつくとき、鐘は、余吾い(へ)いのろいのと鳴ったので、弁慶は腹をたてて、それを蹴飛ばして余吾の湖へはめた。そうすると余呉湖の主——蛇——の目に当たって、今でも余呉湖の主は片目だそうだ。

(三田村、四二九頁)

中郷

○中郷村 東野村の南にあり。……中郷村北寄に谷川あり。其脇に路あり。丹生の谷路とも、洞寿院道ともいふ。谷道五町許行て洞穴あり。洞中深して計り難し。雨乞の洞といふ。歳旱の時は土民斎戒沐浴して、洞の中に入。必雨降といふ。(蘆田、六三〇八頁)

鉛練比古神社 中之郷の氏神である。祭神、大山咋命。配祀、天日槍命。延喜式内社で、三百年くらい前に滋賀県坂本の日吉神社から受けてきたものと伝えられている。中之郷まで海だつたころ江連比古神社と呼んでいたが、水がひいたので鉛練比古に改めたという。……境内社として北野神社がある。

秋葉神社 鉛練比古神社の境内社。祭神、齊火武主比命、奥津日子命、奥津比売命。……秋葉神社に合祀されているものとして北野神社、祭神、菅原道真公、……の五社がある。

天満社 祭神、菅原道真公。御神体、鏡。祭りとしては一月二五日に口薬師の供養が行なわれ、九月二五日に南頭講(天神講)として女性の信仰が厚い。(東洋大、一〇六頁)

太鼓踊 第六、綾の踊（東洋大、一三八～一三九頁）

天の織女があやおり召さる

お天神様のおしよぞくに

お天神様のおしよぞくに

お天神様のおしよぞくならば

みんな氏子に綾おらそ

みんな氏子に綾おらそ

すえははるかにまだながけれど

あやのおどりはこれまでよ

八戸

八幡神社 八戸の氏神である。祭神、菅原道真公、応神天皇、皇大神、御神体は石だが詳しいことは不明。（東洋大、一〇五頁）

菅並

六所神社 菅並の氏神である。祭神、天忍穗耳命、天之穗耳命、大山祇命、櫛御氣野命、金山彦命、菅原道真講。社伝によると、社の真下の深草に大蛇が住み通行人を害したが、ある時山伏六人が熊野から当地に来てその難を救うために大蛇を殺した。そこで通行人の愁は除かれ奥の村民はその恩に報いるために崇め奉ったということである。（東洋大、一〇七頁）

国安

……この部落は、天神前と国安とに分かれているが、天神前とはここに式内草岡神社があるのでこう呼ばれている。また、天神前だけの講・野神があり、国安だけの講・野神があり、その他に全体の野神がある。……五ヶ踊りの中心である国安は、現在でも祭典社によって踊り、囃子が伝承されている。（東洋大、一一頁）

○天神前村 国安村の端村也。天神社あるが故の名なり。（蘆田、六一三〇五頁）

○片岡天神社 天神前村天神山の麓にあり。

草岡神社 国安の郷社である。祭神、神皇産霊神、彦座王命、菅原道真公。伊香郡志によると、

当庄は余呉庄の総社にして片岡郷の氏神なり、中世以来片岡天神と俗称す。当社の祭礼には池原、東野、今市、文室、国安の五ヶ村古式に則り鉦太鼓を打鳴らし礼装行列を整え神前に参り、盛大なる祭典を行い式踊をなす。其起原は口碑に彦座王命郷民を集め踊を献して神霊を慰め給いしによるとも称す、天承元年（一一三二）当地大旱し郷民相謀り神前に踊を献じて祈願すること七日にして大雨あり、爾来大旱あれば雨乞踊をなす。尚古は神輿祭あり上郷下郷輪番にて奉渡ししが中之郷番に当り丹生村に之を譲りてより当社に行わずという、明治三年（一八七〇）飯野藩庁より式内草岡神社なること認定さる、とある。（東洋大、一〇八頁）

天神講 国安では、一月二五日・五月一日・九月二五日にあり、各自御飯を持ちより、当番は四人で順番制である。講の日に当番は、おこう汁をつくる。おこう汁とはしろ豆（大豆）をつぶしたもの、季節の野菜を入れる。五月一日には、草岡神社に三百度まいる。これは、草岡神社の石段を三百回往復するもので、出席した人数で一人あたりの往復回数をきめる。また、この日に風の願かけをする。（一一四頁）

文室

文室は、第六二代村上天皇の第三子為平親王によって開かれたとの伝説があり、北野神社にはこの親王が尊敬していた菅原道真が祀られているのだという。また京都北部の桜の名所御室から渡って来た人が開いたという伝説もあり、それゆえに文室という名が付いたといわれている。文室の人々は、神社の桜を非常に大切にしており、四月一七日の春祭りにはこの桜が咲き乱れ、近郷の人々の目を楽しませているという。（東洋大、一一頁）

北野神社 文室の氏神である。祭神、菅原道真公。伊香郡志によると、治暦三年（一〇六七）為平親王の令孫播磨守の勧請奉斎せしに始まる、播磨守当地西方山麓の一带の地を開墾し土民に農耕の道を授く之れ文室の起源なりと云う、菅原道真の霊を勧請し山麓に一祠を建て天満宮と称せしが、後社殿を村の中央今の所に奉遷し北野神社と改む、正安三年（二三〇一）の文書によれば当時菅原公を偲びて梅桜を植栽し文室桜として有名なり、古来文室のひざ折神事と称する祭典は正月八日執行さる。此式は七人衆と呼ぶ諸頭にて五斗の鏡餅を供え古之禁裡御所の御用を勤めしたため七人衆は烏帽子白装束にて神主は烏帽子単袴紫指袈裟黄の着用を許可さる。永正十五年（一五一八）以後は脇衆と称するもの之れに加わり明治（元年、一八六八）以後村人氏子一同にて行わる。貞和辛酉の年、菅公五百年祭施行以来恒例として五十年毎に大祭を執行し其記録を存す。神主は村

上家相伝世襲す、とある。境内社として、秋葉神社、祭神、迦具鎚命、稲葉神社、祭神、安食神、座王権現、綾野社、祭神、綾野神、野神社、祭神、野神がある。(東洋大、一〇九頁)

綾戸の桜(東洋大、一七二頁)

文室では綾の神さんを祀っている。今では北野神社に合社されているが、近年まで一月四日には、村中で神社の大きな石垣から道を通って綾戸の桜まで、太い大きな注連を張り変えていた。綾の神さんや綾戸の桜の近くには小さな池があり、そこの大蛇がいてと伝えられていた。川並の余呉湖にも大蛇が住んでいて、それと夫婦であると伝えられている。現在ではその桜はないが、毎年一月四日に綾の神さんのお講というのが開かれている。

(文室 石原とめ氏)

岩手県

岩手の天人女房(網野、他、四八頁)

山形県

山形の天人女房(網野、他、四八頁)

千葉県

羽衣の松 千葉市県庁公園(高橋在久、一二頁)

現在県庁本館のある場所にかつて一本の松があった。そして、「千葉(せんよう)の蓮」の花が咲く美しい池が水をたたえていたという。蓮の花の咲くころは見物人でにぎわっていたが、ある静かな晩、夜目にもあやに美しい天女が羽衣をまとって舞いおり、衣を池の端の松に掛け、ひとり蓮の花を眺めていた。

それを領主の常将が聞きつけ、家来に命じてひそかにその羽衣を隠されてしまった。そして天に帰ることができなくなった天女に言い寄って自分の妻にしまったという。翌年ふたたび蓮の花の咲くころ、天女は男の子を産み、やがてこの瑞祥が都の天皇に伝わると、千葉の蓮にちなむ千葉(ちば)の姓を常将に賜ったそうである。

こうして領主の夫人になり、地上でしあわせそうにみえた天女だが、ある日常将が隠していた羽衣を見つけるや天に舞い戻ってしまったという。そのち、常将が亡くなるときにふたたび下界におりたつて、地上ではたせなかつたとわの契りを天上で結ぶため常将をともない、ともに昇天したと伝えている(一一一ページ「平将門……羽衣の松」)。

新潟県

天人女房の話(網野、他、四〇～四二頁)

石川県

金沢市金石町

飴買い幽霊の子（福田、一、九八〜九九頁）

江戸時代中期にたみという女の人がすんでおられた。妊娠してお腹が大きくなってから亡くなられて、土葬にしたと。その時分、板屋という飴屋があつて、毎日大戸を締めて寝ようと思つた時分に、女の人が遅く飴を買いに來られた。その跡は見えないけれども、飴買いのお金を一文銭貰う時に、飴屋の主人が、何か冷たい―感じがするんですね。それがねえ、一週間ばかり來られたんですが、それからずうっと來られなくなったもんですから、これはおかしいなあと思つてね。お寺の和尚さんのところへ、これこれこんで、女の人が飴を買いに來られたけど、一週間ほど前から來られなくなったと相談に行つたらですね。和尚さんが「不思議なこともある。最近、新しい仏さんが埋められた」と言うことで行つて、新しい塔婆を掘り上げてみたところ、赤ん坊が飴をしゃぶつて元気に泣いておつたというわけなんです。その和尚さん（六代目）が子供さんをね、世話して育てたわけです。その和尚さんが寺の子供として育てて、六代目の和尚さんが亡くなられてから、第七代目の境応という和尚になつたわけなのです。

ところが、この和尚が住職になつた時点ですね。昔は、金石の港は船が沢山出入りしておつたもんだから、おおかた、こちらの方に来る人は、お寺を宿としたということを、聞いております。現在、この道入寺にも船靈觀音さまというのがお祭りしてあります。

たまたま、旅の人が來られたもんだから、その人は和尚さんに、「一晩、宿をして貰つたから何かお礼をしていかなきゃあ」と言うことで、「実は、これこれ……わたしは先代の住職から聞きまして、わたしは母親という者を知りません。あなたは、絵を書くことの先生と聞いております。かい。何か一つ母の像を書いて貰えんか」と言うて、話をしたのがですね、円山応挙さんだったというわけなんです。円山応挙さんは、「そうか」と言うので、書いて残していったのが、現在あります幽霊の姿（七代目住職の母の絵）なのです。毎年、三月十五日のお釈迦さまの涅槃会と、八月十五、十六日の旧盆の時に見せております。『金沢の昔話と伝説』

福井県

敦賀市

金前寺は遠く聖武天皇の天平八年（七三六）に泰澄大師によって開山した真言宗の古刹であり、

また、氣比神宮の奥の院でもあった。延元元年（一二三六）恒良親王 尊良親王を奉じて、金ヶ崎城に拠った新田義貞ら南朝軍の本営が金前寺に置かれ、一大血戦となったが、武運つたなく足利軍に敗れ、義貞は陣鐘を海に沈めた。のち国守が海士を入れたが、陣鐘は逆さに沈み、海底に龍頭が埋まって、引き揚げることが出来なかったと伝えられている。（俳句の里 一八頁）

『俳諧四幅対』（井本、他、四四〇～四四一頁）（新関、六八頁）

おなじ夜、あるじの物語に、此海に釣鐘のしづみて待るを、國ノ守の海士を入てたづねさせ給へど、龍頭のさかさまに落入て、引あぐべき便もなしと聞て、

月いづく鐘はしづめる海の底

鯖江市椿坂

鐘ヶ窪の沈鐘（福田、一、二二〇頁～二二一頁）

昔、当区の山上（字釈導寺）に釈導寺という大寺があった。その寺の鐘は黄金をまぜて作られたので、鐘の音は非常に美しい音を出し、遠く浜まで鳴り響いた。ところが、この鐘が鳴り出すとどんな静かな海でも波が荒れ出し、浜の漁師は漁ができなくなった。そこで漁師たちは相談してこの鐘を下ろしてもらうようにするより途がないからと、漁師の代表が事の詳細を述べ、生活ができないから鐘を下ろしてほしいと申し入れた。よって、十数町離れた「ダイノクドン」という所に移そうということになった。

村人は、それから毎日両方に分かれて作業を手伝い、鐘を下ろし、引いたり、担いだりして谷や川を渡り、狭い坂道を上下してようやく場所近くになったので、一休みした。すると、どうしたわけか、鐘が林の中をガサガサと音※きな音をたてて転がり出した。村人はこれは大変だと大騒ぎになったがどうすることもできない。ついに河和田中の者が集まって鐘を引っ張ったが、鐘は少しも上がらず、見ている中に地面の中に沈んでしまった。その時、沢の者が一人も来なかった。で、鐘が、「別司、別司」と言って泣きながら沈んだという。それで、沢の者は今の別司に追われたので沢田という姓が残っているのだという。鐘の沈んだ穴は今も残っているが、とても深くて入れない。それより後はこの付近を鐘ヶ窪と呼んでいる。現存している国宝の丹生郡織田町剣神社の鐘がそれであるともいわれている。（「南越」三十四号）

山梨県

山梨の天人女房（網野、他、四八頁）

静岡県

※音 ママ、大カ

静岡市中平松（角川、二二一七〇三〜七〇四、一〇六六頁）市の南東部。有土山南麓に位置し、南は駿河湾に臨む。天女社（駿河志料では天人社）は羽衣伝説にゆかりがある。天羽衣神社があり、大字青沢・中平松・西平松の産土神が祀られ、羽衣の舞が行われる。

伯梁屋敷 清水市中平松 天人社（ぎょうせい、八〇〜八一頁）

三保松原

羽衣 われ三保の松原に上り、浦の景色を眺むる処に、虚空に花降り音楽聞こえ、靈香四方に薫ず。これだだことと思はぬ処に、これなる松に美しき衣懸かれり。寄りて見れば色香妙にして常の衣にあらず。いかさま取りて帰り古き人にも見せ、家の宝となさばやと存じ候。（野上、二一五六三頁）

『本朝怪談故事』 卷第三（高田、他、一三三〜一三三六頁）

第二十四 三穂仙境

駿河国三保社ハ有度郡、『神名帳』ニハ三穂津姫ト云ヘリ。是レハ羽衣ノ明神カ。三保松原ハ地景希有ナル名所ニテ、北ノ方ハ富士ノ嶺、雲ヲ凌ギ、蒸上ル煙ハ其色青フシテ、四時ノ雪消事無ク、斯所ハ仙境也ト云ヒ伝ヘタリ。唐ヨリモ此所ヲ蓬萊山ト名クトカヤ。往昔、天女降りテ、羽衣ヲ此所ノ松ノ枝ニ懸置ケルヲ、漁夫ノ翁、是ヲ拾テ還サズ。天女力ナクシテ、彼漁父ノ妻トナル。年月ヲ経テ、彼羽衣ヲカヘシケレバ、天女喜テ彼夫モ仙トナル事ヲ教ヘ、天女ハ雲上ニ飛去ル。漁父モ終ニ仙トナル。不老不死ノ身ト成リテ、足柄山ノ辺リニ往来セリ。今モ猶里人ニ見ヘシト、

『諸社一覽』ニ記セリ。

○ 宇度浜ニ天ノ羽衣昔キテ振ケン袖ヤ今日ノ祝子ト説侍ルモ、能因法師ノ歌ニテ諸人知ル所也ト云云。

案ルニ、昔神女来テ羽衣ヲ松ニ懸タルトハ、是乃、『駿河国風土記』ノ説也。世俗相伝ヘタル事、尤モ尚シ。故ニ、羽衣ト云謡物ニモ作リテ、申樂家ニ弄セリ。『神社啓蒙』ニ、今伶人家ニ東遊ト云事アリ。昔、安閑天皇ノ時（二七代、五三二〜五三五）、駿河国有度浜ニ天女降りテ、歌舞ヲナス。道守氏ノ翁ト云者斯ノ曲ヲ伝フト。按ルニ、三保社ハ平林ノ中ニアリ。羽衣ノ社ハ夫ヨリ数十歩行テ、沙陵ノ中ニアリ。『東海名所記』ニ、三保松原ニハ羽衣ノ松、又楠ノ大樹アリ。皆神木也トテ冊ヲ結テアリ。此所海辺ハ獵師アリテ皆塩ヲ焼ク。又野馬アリ。此浜ノ景色筆ニ尽シガタシ。北ニハ富士山高聳ヘ、南ニ洋海アリテ久能山嶮シ。西ニハ清見ガ関、田竈ノ浦ノ絶景、殆ンド、凡境ニアラズ。天女神仙ノ遊息スル所ナルベシ。昔ハ天女降シ事所々ニアリ。『河海抄』

ヲ見レバ、昔シ天武天皇ノ白鳳八年(六七九)ニ八月十五夜、帝、琴ヲ弾ジ給バ、天女降テ五度袖ヲカヘシテ舞ケル。是レ和州吉野山ニテノ事ニヤ。夫レヨリ其所ヲ袖振山ト云ヘリト、『吉野拾遺』ニモ見ヘ侍ル。五節ノ舞姫ノ始也トモ云ヘリ。

○乙女子ガ袖振山ノ水籬ノ久シキ代ヨリ思ソメテキ

ト読ルハ人麿ノ歌ニテ、『名所記』ニモ見ヘ、勝手明神ノ左ニアリ。此山ノ頂上ヲ那良志ト云。彼乙女ノ袖ヲカヘシタル故也ト云ヘリ。驚按ルニ、是丹後国ノ奈具社ノ事跡ニ相似タリ。『丹後国風土記』ニモ見ヘタリ。又異朝ニハ『搜神記』十四卷(七丁)ニ之似事ヲ記シタリ。縷舉ニ遑アラズ。

【本朝神社考】(秋本、四四七頁)

案風土記 古老伝言 昔有神女 自天降来 曝羽衣於松枝 漁人拾得而見之 其輕軟不可言也 所謂六銖衣乎 織女機中者乎 神女乞之 漁人不與 神女欲上天 而無羽衣 於是遂與漁人為夫婦 蓋不得已也 其後一旦 女取羽衣 乘雲而去 其漁人亦登仙云

頭注に「東遊の駿河舞の起源説明として語りはじめられた説話の如くで、古代の風土記の記事とは認められない」および「前文に「三保松原者、在駿河国有度郡有度浜云々」とある。三保松原は静岡県清水市、駿河湾に突出した岬部にあるが、平安朝(後拾遺集の能因の歌・和歌童蒙抄など)では有度浜とあつて三保の名はまだ出ていない。有度は三保の西方三―四軒の地」とある。

三重県

三國地志卷之九(蘆田、八五六―五七、五九頁)

○一目連神社一区在本宮前按、此第三之別宮也、其神号者本宮御同神、而地主隱名之一例也、其社在本、無御扉、而有御幌、有透戸、其所由一秘之社伝也、旧記云、一目連者往昔自成却為地主、而本有寛王不動王也、尋垂跡和光之源旨、則一宮大明神是即以国常立尊奉崇之、々云又一目連本伝云、抑此神者在高天、則金輪星是也、天地未分、当如浮膏之時、乘天浮雲、綱臨于当嶽焉、然則当山地主其源旨微哉、本地不三寸不動而則大日如来之垂跡也、權其神号称一目連、在高天則奉申天目、四海納掌、飛行自在神態也、略下或問、国常立尊之化現、何為自初不称直号、而仮一目連之名耶、曰夫物皆有初生熟成之漸、本邦開闢之初、国常立尊当三極神人之位、化生而最生、因一葦之萌牙化成神人、神代諸神此例尤多矣、加旃天照大神勢州御鎮座之初、變化神猿田彦大神其裔太田命、先御鎮座二百八歳、或八歳時至運熟御鎮座之後、先神隱身字興玉神、……

按、(伊勢国桑名郡)多度村に坐す、兩大神宮を除くの外、国内の大社、本社を最とす。……別宮

一目連社、本社の前南面に坐し、扉なし、国民甚だ其靈異を崇め貴ふ、
滋賀県

大津市

『近江国輿地志略』

比叡山

○遺教院 或は遺教坊ともいふ。講堂の岸、八・九間程隔て南の方の下にあり。講堂よりさしわた
しは三十間ばかりなり。其古は法性坊と号せるにや。

○法性坊尊意旧跡

○遺教坊 東搭南谷にあり。是法性坊尊意の旧跡なり。

【元亨釈書】曰、釈尊意姓丹生氏、平安城人、其先応神天皇之胤也、元慶三年(八七九)上台山、
延長八年(九〇八)六月、戸部尚書藤清實、尚書右中丞平希世、二人於清涼殿逢雷震死、皇帝惶怖
玉体不予、乃移常寧殿、召意宿禁中持念、初意在叡山、一月菅丞相化来語曰、我已得梵釈許與欲
償夙慰(懟)、願帥道力勿拒我也、意曰、然然率土者皆王民也、我若承皇詔何所辟乎、菅作色、適
薦柘榴、菅吐哺而起、化作焰、坊戸烟騰、意結瀉水印擬之、其火即滅、焼痕尚在焉、已而菅靈蹈
石登天云々、臣按ずるに、虎関【釈書】に、此説を載しより以来、俗説ますます盛にして、俗間
印行の書にも此説を書記す。猿楽者流の舞車などいへる謡にも、此を謡もて行ほどに、兒女子皆
此説を信用して、彌一盲衆盲を引の迷惑となれり。愁息すべし。師鍊もさばかりの人なりといへ
ども、浮屠氏の癖にならつて、尊意が徳を称せんとて、却て意が不徳を顕はすものなり。斯いは
腐儒の見解、不可思議の理を知ざる故なりと笑ふけれども天地の間、豈理に二つあらんや。菅
公は凡人にあらず。忠誠塩梅の臣たり。左遷を以て君を恨憤り給ふ事、いさゝかも有べからず。
菅公左遷以後の詩文を以て見るべし。如何ぞ君を怨み給ふ事あるべけんや。君々たらずとも、臣
以て臣たらずんば有るべからざるの理、菅公の常の給ふ処なり。都に火災あり、雷電し、震死
せし人有しは、自然と天の悪氣に感じたるにて、菅公のかつてあざかりしり給はぬ事なり。菅公
もし讒者を怒て、震死せしめ給ふならば、讒人藤原時平・菅根・定国等なるべきに、此輩は恙な
くして、清實・希世が震死せしを以て知べき事なり。人死して、暫く祟を成事なきにしもあらず。
【左伝】に、伯有は厲の事を載す。しかれども是は凡人なり。豈菅公と日を同じくして語るべけ
んや。決してなき事なれども、若菅公、梵天帝釈天のゆるしを得て、一天の君をわさはひし給ふ
ことあらば、何すれぞ尊意等が力を以て、是をふせぐ事あらんや。亦菅公も、尊意が都に来るこ

とを恐れ給ふべからず。是等を以て、其偽りなる事をしるべし。近比丹羽樗山の【田舎莊子】にもしるせる様に、もし実に尊意が坊へ左様のもの来る事あらば、狐狸の妖怪なるべし。或は尊意が心魔なるべしといへり。理なる哉。大凡物皆、己が心を以て是非を論ずるが故に、公論となりがたし。或人、僕をなじつて曰、何ぞ菅公を知りがほに論をなす。菅公は儒臣なり。【孟子】に、君視臣如土芥、則臣視君如寇讎とあり。左あれば延喜帝の讒者を信じ、菅公を土芥のごとくし給ふ時は、菅公もまた寇讎のごとく怒て雷となり、讎を報じたまふべき事なり。汝が見解笑ふべしといへり。臣これが為に嘆息せざる事あたはず。孟子にあるは、君たる人々の教なり。臣たるもの、いづくぞ視君寇讎のごとくすべけんや。君きみたらずとも臣以て臣たらずむば有べからず。君の、土芥のごとくし、讒者を信じ、誤なき菅公を筑紫へながし給ひしは、延喜帝の罪にして、菅公の罪にあらず。菅公なんすれぞ怒り給はんや。殷紂王は独夫なり。武王は聖人なり。聖人、独夫の紂をうて給ふさへ、吾日本にては忌憚事なきにしもあらず。是神国の神道、君は君たり、臣は臣たるの故あるを以てなり。菅公何ぞかゝる事あらんや。黙識すべし。

○登天石 遺教院の門前にあり。菅公の霊、此石を踏で登天し玉ふと云。是も【元亨釈書】の説に依て、後世好事のものゝ設しなるべし。かゝる類多し。【源氏物語】は、紫式部が寓言にして実事なし。源の高明公などを、光源氏になぞらへ思ふて、作しなどゝいへども、実に光源氏といふ人はなし。然るに摂津国須磨に、光源氏の家敷といふ処あり。京師堺町通松原の北に、夕顔の塚あり。石山に夢の浮橋あり。皆後世好事の者のなす処にて、信用すべきにあらず。登天石も此類にや。後考をまつのみ。

○天満天神社 右同所にあり。菅公の霊なり。法性坊尊意、方外の交りあるを以て、此処に祭といふ。天神の御事、別に伊香郡余湖の條下にしるす。(蘆田、三二二〇頁)

比叡山にも一眼一足といふ化者久しく住み、常は西谷と東谷のあひだに於いて人はこれに行き逢ふが、何の害をもせぬ故に知つてゐる物はこれを怖れないといふ話がある。「萬世百物語」にはこの事を載せて、さらに或法師が一夜月光の隈なき時、図らずこの物を見たといふ話を録し、さうして「前の山を足早に駆け降るを見れば云々」といつてゐる。(柳田、五一二二頁)

○道天神社(上坂本) 穴太村より六町ばかり、北道より西の山上にあり。半町ばかり上なり。土俗云、菅丞相、法性坊へ通ひ給ひし時の、憩息の地なり。後社を建るといふ。(芦田、三二三四頁)
○天神社 法光寺(志賀郡苗鹿村)の界内にあり。祭ところ菅丞相の霊、比良村より勧請する処なり。(芦田、二二八頁)

彦根市

北野神社 馬場 二代藩主の創建になる。隣に北野寺がある。(久保田弥一郎、一九四頁)
近江八幡市

青根天満宮 船木(角川、二五・七八〇頁)(中山、一〇・二三・三五頁)

【輿地志略】(蘆田、六一・五二・五三頁)

○青根天神社 舟木村の北にあり。比牟礼山青根天満宮と号す。或は船木の天神宮と云。八幡山の南面なり。天満宮の社僧を、香梅寺といふ。神記曰、人皇六十六代一条院御宇、寛弘二乙酉の年(一〇〇五、乙巳か)青根長者の建立。祭所の神、菅丞相の霊なり。神体は菅公束帯の木像。摂社有、吉祥天女・乙護法。祭礼毎年三月二日、五月五日。

○香梅寺 青根天神の社僧なり。本尊は阿彌陀如来・聖徳太子の作也。寺は草津市

上笠天満宮 草津市上笠町

上笠天満宮由緒

祭神 菅原道真

高御産霊神

上笠天満宮は、天智天皇の御代九年笠朝臣によつて勧請されたと伝える古い神社である。菅原道真公は、九住七代後村上天皇の御代観応二年の創始であつて、近江国栗太郡梨原荘笠之郷医王寺絵図面内に在つて、当地周辺は宝光寺四至別院笠堂医王寺故地とも云われている。

高御産霊神は、昔此地を笠の郷と称し、当時この地の住民であつた笠氏の祖神である。近江輿地志略に上笠村此辺を笠縫の里と云へりとある。又栗太郡誌には、上笠三郷とは、野村・古名上笠中村・川原村とある。

この宮に江戸初期頃から演じられてきた無形文化財上笠天満宮講踊が保存会によつて現在も継承されている。

例祭 五月三日

秋祭 十月二十五日

上笠天満宮講踊略記

当社は天智天皇の御代九年笠朝臣によつて勧請されたと伝える古い神社であります。講踊りは、この宮の奉納されるもので、五穀豊穰、無病息災、雨乞いなど氏子の安息を祈念するもので、近江の湖南地方に伝わる風流踊りの一つである。江戸初期から行われた踊りであつて古い芸能を留

める貴重な民俗芸能である。踊り子の役は多彩で役付、心棒打、太鼓打、中踊、外踊などあつて服装もそれぞれ異なり頭には神の依代として花笠をがぶる姿も誠に優美である。踊り振りは複雑で、越前道行壱番から花見踊二十九番までの小歌調歌詞に合わせて踊るのであるが高低、緩急の太鼓の調子に合わせた身振りを必要とする踊りでもある。歌詞の内容は小歌を集めて面白おかしくしたものや抒情詞・し抒事詞として歌われるものなど一番一番が変化にとんだものであつて、江戸時代の農民の創り出したすぐれた踊りの型をここに見ることができて、よく祖先の生活全体像を考察する上に貴重な資料として民俗芸能のうち価値の高いものとされている。長らくとだえていたが昭和三年春菅公一千二十五年式年大祭に氏子の至誠相結集して復活し、昭和三十四年皇太子殿下御成婚奉祝記念として奉納、この民俗文化財を後世に伝え保存すべく昭和四十九年五月保存会を設立して現在に至る。

一 昭和五十三年十月十九日 草津市無形民俗文化財に指定。

一 昭和五十四年三月三十日 滋賀県撰択無形民俗文化財に撰択。

以上

十一月吉日 献納

上笠天満宮講踊保存会

御大典奉祝記念

天満宮講踊 草津市上傘町で毎年二月三日（もとは一〇月九日）に行われる。由来は定かではないが、天満宮に降雨を祈願して慈雨をえたお礼踊が起りであつたとつたえる。講踊とは小踊のことであろう。構成は、新発意二人、太鼓打二人、中踊約二〇人、外踊多数、警固若干で、新発意を先頭に越前道行をうたいながら宮入り、拝殿の回りをかこむ。新発意の口上で踊がはじまり、一曲おわると「静まり給え、静まり給え」で一同蹲踞して休息、ふたたび口上でつぎの曲がおどられ、以下これをくりかえす。踊歌は二九曲ある。踊の合間に「鳥指しよもん」といつて、烏帽子に裁着袴、手に釣竿か槍をもった男が登場し、太鼓と掛声にあわせてコミカルに歌いながら、おどる所望の踊がある。（長谷川 嘉和、一六四～一六五頁）

上笠天満宮講踊 出演団体 上笠天満宮講踊保存会

草津市上笠町（旧の栗太郎笠縫村字上笠）は、今でこそ急激な開発等により新興住宅地と化しつつあるが、かつては草津川流域のしずかな田園地帯であつた。上笠の人々は天満宮を氏神と祀り、最例には「講踊」を奉納してきた。『近江栗太郎志』（大正一五年刊）には毎年一〇月九日に踊った

ことが記されている。講踊の由来は定かではないが、天満宮に降雨を祈願して、慈雨を得た御礼に踊った伝える。今の古老のなかで雨乞踊としての踊を経験した人はいないようである。昭和三年に御大典を祝して野洲の御上神社に奉納して以来、久しく休止していた踊を、昭和三四年に皇太子御成婚を祝して復活したという。現在は五月三日あるいは十一月二三日に奉納することとなっている。

講踊はコオドリとも称すところから、大踊に対する小踊を意味するものかも知れない。その構成は、シンボウチ(新発意)二名、太鼓打二名、中踊二〇名前後、外踊多数、警固若干名、音頭と数名からなる。シンボウチ・太鼓打は、ジュバンにタチツケバカマをはき、頭上には笠骨に紗を張った妻折笠(花笠)をのせ、手甲、黒足袋、ワラジをつけ、襷を掛ける。シンボウチは手に軍配団扇を持つ。太鼓打は縮太鼓(経四〇cm)を皮面を両側にして胸前で固定し、タロの木で作ったバイを両手に握る。中踊と外踊の衆は共に一文字笠をのせ、浴衣、白足袋、ゾウリをつけ、梅鉢紋の団扇を持つ。このうち中踊の衆のみ紋付羽織をつける。

シンボウチ、太鼓打を先頭に一列になって「越前道行」を歌いながら宮入りし、道行の終節の「ままるにござれよままるにござれ、十五夜の月の輪のごとく」で神社の拝殿を踊子を取り囲む。拝殿の上の周縁部に中踊が、中央部にシンボウチ・太鼓打がそれぞれ向いあい、図のような配置についてシンボウチの口上を待つ。「音頭取たのみましよう太鼓の頭。イヤア〇〇踊をひとおどり、イヤアひとおどり」の口上をうけて音頭が始まる。このとき、音頭取にあわせて中踊の衆もおどりながら歌う。一曲が歌い踊ればシンボウチの「静まり給え、静まり給え」の指示で、一同うずくまって休息をとる。ついでシンボウチの口上で他の曲が歌い踊られ、以下、この繰り返しとなる。今日、伝えられている踊歌は、越前道行、花の踊、奥洲踊、御寺踊、城の踊、綾の踊、嫁引踊、花見踊など二九種を数える。これらの多くは、「〇〇踊をひとおどり」「〇〇踊をおんどろよ」と歌い始め、それを一節ごとに繰り返しつつ、最後に「〇〇踊はこれまで」と歌って止める構成になる。また、踊のあいまに、一同が休息をとる際、余興として、烏帽子をかぶり、タチツケバカマをつけた人物が、手に釣竿あるいは槍を持って、太鼓の拍子と掛声にあわせてコミカルに歌いながら踊る「鳥指しよもん」と呼ぶ所望の踊を伝えている。

講踊は、近江の湖南地方に伝わる風流踊の一つで、草津市渋川の花おどりと同系統である。ともに風流踊としてよく特色のある歌を残し、芸態も古い姿を留めている。

滋賀郡

志賀町

『近江国輿地誌略』卷三〇

○比良村（志賀郡） 南比良・北比良の二村あり。比良山の東のふもとなり。比良浦・比良湊などいふも、此地の事也。

○天満宮社 北比良村にあり。祭る所菅丞相の靈なり。其縁起略にいはく、江州志賀郡比良天神は、天慶五年（九四二）七月十三日、文子といふ女にかゝり、御託宣あつて、山城国北野右近馬場に鎮座の地を構よとありけれども、身貧賤にして社を営事もならず、竹の籬に注連引崇たてまつる。同九年（九四六）三月十五日、近江国比良の禰宜三好良種が子、太郎丸と云七歳の児にかゝりて御託宣有り。先に西京の文子といふものによつてしめすといへども、人々信ぜず。我居せん所には松の種をうゆべしと。良種こゝにおいて西京に至り、文子をよび朝日寺の僧最鎮に告しめし、ともに請官宮社。其夜北野に千株の松を生ず。又比良村に松を生ず。因茲二処に建社云々。縁起繁文なり。故にその要をとつて載す。縁起に添状有り。曰、江州志賀郡比良郷天満大自在天神者、昔在一夜松神託之靈地也、当与帝都北野社合徳同業者也、是以神徳無窮、靈跡長存、然及戦国大破以其奥粵、大鳥居権大僧都信祐、有繼絶起廢之志、奉納縁起一軸、令州人知其濫觴、以祈天下泰平国家安寧云、

元禄四辛未年（一六九二）三月二十五日 中務大輔菅原朝臣長時

扶桑略記第廿五 村上（天曆九年）（九五五）（黒板、一二二二八～一二二九頁）

○三月十二日。酉時。天満天神託宣記云。近江国比良宮天。禰宜神・良種加男太郎丸。年七歲留童二託宣天。我可云事有リ。良種等聞ケ。我加像如作ヲ。笏ハ我加昔持リ有リ。其ヲ令取ト仰給フ。良種等申久。何処加候年。慈仰給ス。我物具ハ。此仁来住シ始皆納置リ。仏舍利ハ富部不令持リ。是皆筑紫ヨ我カ共ニ来ル者ナ。若宮乃前松。富部ト云者ノ二人有リ。笏ハ老松持セ。仏舍利ハ富部不令持リ。是皆筑紫ヨ我カ共ニ来ル者ナ。若宮乃前小シ高所ニ地下三尺計入テ有リ。此二人ノヤツトモハ甚不調ノ者止。心仕セ。我カ居ル左右ニ置レト不言。尔ト思モ。笏ハ依天云フ。此年来ハ像モ無ク有リ。不告之有リ。老松ハ久我仁隨成者也。是南至所毎仁松乃種ハ時久。我昔大臣止在シ時仁夢仁松身生天即折南見シ。流非幾相相利。松ハ我像乃物也。我瞋患身止成利。諸乃雷神鬼ハ皆我加從類成天。總天。十万五千仁成利。只我所行事ハ世界火乃難乃事也。帝釈毛一向仁任給多。其故ハ。不信乃者世多成利。疫癘之事行止宣ハ。此我伴類無所々二使仁礼行留。今ハ只不信仁有人。雷等仁仰天令蹈殺無。惡瘡不吉物ハ有女。汝等モ我為仁不信南。子孫絶天無止。阿波礼加久云許也。世界仁佗比悲不

○正一位天満天神社 堂村に在。祭所神菅公也。相伝、菅丞相在世の日、勅使として金勝寺に來り給ふ時、此地に暫く御坐を占させ給ひし故に、後此地に社を營造して於野宮と号す。

土俗の天宮と云は非なり。此社造営は、洛北北野社鎮座十三年以後のことなり。往古金勝山の惣鎮守なりしと。今金勝五村の惣社なり。祭礼は毎年三月十八日。社僧あり、菅神寺とごうす。真言宗也。今も昔の形とて楼門等残り。当社の記録は、天文十八年(一五四九)、金勝寺炎上の時焼失すと云。楼門の額には正一位天満天神の七字を書す。(芦田伊人、三三三頁)

里内勝治郎氏の通信によれば、近江粟太郡笠縫村では一村今以つて麻を植ゑず、植ゑても成育せぬ。その仔細は大昔この地に二柱の神降臨ありし時、付近に麻があつて神これを以て眼を傷けたまふ。それよりしてこの郡の天神宮の御神体も、今に御眼より涙を御出し成されといふ。これは甲の神が眼を痛め乙の神の眼から涙が出た例であるか、はたまた神御自身の御怪我が、御霊代たる御像に移つたといふのか、今一度尋ねてみなければ精確でない。(柳田、五一二頁)

甲賀郡

水口天満宮、水口町 綾野 祭神 菅原道真公 神紋 中丸梅鉢 社報木彫の烏蛇・白蛇二基 延喜元年菅丞相筑紫へ左遷の時、一子秀才淳茂は美濃部の郷武島家に流配された。(名鑑、下三三頁)

近江国輿地志略 ○天満天神社 水口郭内に在。相伝、往時菅相公筑紫へ左遷の後、公達自帝都の住居成かたく、所々に離散し玉ふ。淳茂公此地に來りて、美濃部村に住居し、其後帰洛の日一子を此地に残し玉ふ。今的美濃部氏の祖是也。天慶年中菅公の木像を彫刻し、此地に祭玉ふ。今の天神社はなりと云。神主石王中務が【神略記】に見えたり。祭礼毎年六月十三日。(蘆田、六一二五頁)

甲賀郡

○天満天神社 牧村に在。祭神官丞相の霊也。徳治三年是を勧請す。祭礼毎年四月初の卯、五月五日、宮町村・黄瀬村の産土神なり。(蘆田、六一四頁)

○天満天神社 勅旨村に在。社僧光源寺と云。

○天神社(針村)(蘆田、六一五頁)

○天神社(蘆田、六一二頁) 堂村に在。祭神勸丞相の霊也・鎮座の年記詳ならず。社檀に一尺許の円石あり。参詣男女祈願の吉凶を占んと欲して、禰宜に此事を乞へば、禰宜神前にて其言を高く唱、吉なる時は、軽くあがり。凶なる時は磐石のごとくに重し。其奇特いちじるし。近国の男女参詣甚多し。界内に観音堂在。観音作未詳。

○天神社 同村(北脇村)に在。(蘆田、六一二頁)

○天満天神社 水口郭内に在。相伝、往時菅相公筑紫へ左遷の後、公達自帝都の住居成かた、所々に離散し玉ふ。淳茂公此地に來りて、美濃部村に居住し、其後帰洛の日一子を此地に残し玉ふ。今の美濃部氏の祖是也。天慶年中(九三八〜九四七頁)菅公の木像を彫刻し、此地に祭玉ふ。今の天神社はなりと云。神主石王中務が【神略記】に見えたり。祭礼毎年六月十三日。(蘆田、六一二五頁)

○天満天神社 同村(北内貴村)に在。(蘆田、六一三〇頁)

○天満天神社 西内貴村にあり。(蘆田、六一三〇頁)

○天神社 同村(塩野村)に在。(蘆田、六一三〇頁)

○天神社 (伊佐野村)(蘆田、六一三七頁)

水口は古名を美濃部郷といつて、菅原氏の莊園だった。菅原道真が太宰府へ左遷された時、四男の淳茂もまたこの地に移されて二〇余年間を過ごし、子孫は美濃部姓を名のつて土地の豪族になったという。

水口天満宮はその淳茂が刻んだという道真の木像を祀っている。元は現在の水口城址の南のあたりにあったのだが、城を築くときに社地を動かし、江戸時代の中頃に再転して現在の場所に移ったものだ。旧地には、淳茂が朝夕口を漱いで父の木像を拝したという池があつて、池畔に梅の木が多かったので、「梅ヶ池」と呼ばれておた。(角川、二五九六三頁)(駒、七〇頁)

水口町梅が丘 菅原道真野四男淳茂がこの地に多数の梅の木を植えたという伝承がある。(角川、二五九六四頁)

近江国興地志略 五一 ○天神社 堂村に在。祭神菅丞相の靈也。鎮座の年紀詳ならず。社壇に一尺許の円石あり。参詣男女祈願の吉凶を占んと欲して、禰宜に此事を乞へば、禰宜神前にて其言を高く唱、吉なる時は、軽くあがり。凶なる時は磐石のごとくに重し。其奇特いちじるし。

近国の男女参詣甚多し。界内に観音堂在。観音作未詳。(蘆田、六一二二頁)

蒲生郡

愛知郡

天女伝説 愛東町妹(駒、八〇〜八一頁)

妹の少し西の鯉江という所は古くから興福寺領で、莊官鯉江氏が城のような立派な館を構えていた。信長の上洛軍に抵抗して焼かれ、館址だけが残っている。

いつの頃のことか、その鯉江の莊官友貞が妹の池のそばを通りかかると、水浴びをしている美しい娘がいた。声をかけたがにつこりと笑うだけなので、友貞は木に掛けてあつた女の衣を持ち去った。衣を奪われた娘はやむを得ず友貞の妻になり、六人の子どもを儲けて、七年の歳月が流れた。

嫁をもらつて七年目には、親戚縁者を招いて一席を設ける習慣がある。友貞もそれに従つて盛大な宴を開いた。ところが酒宴の最中に末の子が泣き出したので、乳母が子守唄を唄つてあやした。その子守唄を聞くと、友貞の妻はついと立つて部屋を出ていった。子守唄には、衣の隠し場所が唄いこまれていたのである。はつと気づいた友貞はあわててあとを追つたのだが、妻の姿も隠した衣もすでに家の内になかった。庭へ飛び出した友貞が見たのは、白い光を放ちながら星空へゆつくりと漂い昇つていく天女の姿だった。

天女が水浴びをしていた池はおこほ池と呼ばれていたが、今は埋め立てられて姿を消している。おこほは、天女が友貞の館にいたあいだ呼ばれていた名前である。

犬上郡

天稚彦神社（あめわかさん） 高野瀬 祭神 天稚彦命 五柱（菅原道真公を含む） 神紋 鶏。坂田郡 米原町入江磯 近江坂田郡入江村大字磯

「近江国輿地誌略」 卷七七（蘆田、六二〇六―二〇七頁）

○磯崎大明神社 磯山の上にあり。祭所の神日本武尊なり。相伝。日本武尊東夷を征し、帰陣のきさみ伊吹の大蛇を跨り足を痛、発熱悩乱して醒井の清泉に足をひたし、暫時其毒気さむるといへども、終に犬上郡千々の松原に崩じたまふ。因て以て此地に祭り奉るといふ。……祭礼毎年四月八日。古昔は四時の祭礼とて、正月初亥、四月八日、九月九日、十一月二十一日に祭礼の礼ありて、此村の外仏生寺村よりは、炭薪を奉獻し、甲田村よりは神供料をさぐぐ。往古は四月七日に湖水に網を下し、鯽魚二を得、一を神供に献ず、一は片鱗をとりて湖中へ放。必然として翌年四月七日の網に此魚を得るといへり。然れども時移世かはりて、その祭祀も止、漸四月八日の祭祀のみぞ行はる。神威は古今かはらず。不浄汚穢あれば必祟あり。

磯崎大明神（柳田、五一―四二頁）

毎年の例祭卯月八日、網を湖中に下して二尾の鮒を獲て、その一を神饌に供へる。他の一尾は片鱗を取つて湖中に放しておくと、翌年の四月七日に網にかゝるものは必然としてその鮒であつたと、載せてある。即て前年度しるしをつけておいた分を神に供へるとともに、次年度の分をきめ

て一旦放し飼ひにすると云ふのである。

坂田郡

近江町

更級日記(吉岡、三八一頁)

雪ふり、あれまどふに、ものの興もなくて、不破の関、あつみの山などこえて、近江国、おきながといふ人の家にやどりて、四五日あり。

国史大事典 息長氏 おきながうじ (青木、二七七五頁)

古代豪族。本拠は近江国坂田郡息長(滋賀県坂田郡近江町)。羽田・山道氏らとともに応神天皇の子稚野毛二俣(わかぬけふたまた)皇子の子意富富等(おおほど)王を祖と称する。姓(かばね)は公。天武天皇十三年(六八四)に真人と改正。継体朝から皇室と姻戚関係があり、地位の高いわりには政界に有力者を出さなかった。同族の息長丹生(にう)真人は奈良時代に画師を輩出。

滋賀県百科事典 息長氏 (山尾幸久、一二三頁)

姓は天皇家近親氏族にさづけられた真人(元来は君)。五世紀中ころから坂田郡阿那郷(現、坂田郡近江町息長)付近に台頭し、現、近江町・米原町一帯にさかえた。坂田郡では、現、長浜市を本拠とした坂田酒人氏とならぶ名族。三国君・山道君・坂田酒人君・羽田君らとともに意富富杼王(応神天皇の孫、稚野毛二俣王の子とされているが、この事実性はあきらかではない)を祖とする。『古事記』『日本書紀』では皇族としてのあつかいをうけており、継体天皇の父親は息長氏とみられている。渡来系氏族そのものか、そうではなくてもそのつよい影響下に台頭した氏族。朝鮮貴人來着の聖地越前筭飯浦(現、敦賀市)の神を守護神とし、倭建命や神功皇后の伝承にもふかくかかわっている。族称については職能起源説(海人の息長、鍛冶の輔の息長)と地名起源説(氣噴(いぶき)と一対の気長(おきなが)がある。継体天皇の妻、敏達天皇の妻(広姫。墓は坂田郡山東町村居田。ただし現息長陵は一八七五「明治八」の築造)をだし、大和国城上郡忍坂、山城国綴喜郡普賢寺にも進出した。同族に息長丹生氏・息長山田氏がいて、前者は奈良時代に多数の画師をだした。山津照神社古墳、塚ノ越古墳、人塚古墳などは最盛期の在地息長氏の墳墓とみられている。

東浅井郡

浅井町

来生寺 北野 真宗大谷派。比叡山千日回峰行の創始者相応出生の地。和尚と親交のあった菅原道真から贈られた鏡と自作の木像が今も安置されている。神社は北野神社。(角川、二五一〇二三)

伊香郡

木之本町

伊香具神社 大音 祭神…伊香津臣命。加久土神を祀った小社あり。小社は意太(おふと)社または大音(おとう)明神とよび、集落名と一致する。『三代実録』貞観七年(八六五)の項に、物述部族の祖伊香色雄命が大和伊香郷よりこの地に移るとある。『延喜式』には伊香郡四十六座のうち、唯一の大神で後に系族が郡内各地の祭神となっている。貞観元年(八五九年)近江国従五位。社伝には寛平七年(八九五)菅原道真が法華經金光明經の手写を奉納とある。(今井清右エ門、二六頁)

当郡開発の祖神。白鳳一〇年伊香宿禰豊厚が創建したと伝えられる。寛平七年には菅公の奏達により正一位勲一等大神大明神の勅額をたまわった。(名鑑、下三二頁)

『特選神名牒』(前略)伊香連は新撰姓氏録伊香連大中臣同祖天兒屋根命十世孫巨知命之後也とみえたる同族にて伊香刀美は同書一本に天兒屋根命天押雲命天多禰子命宇佐臣命大御食津臣命巨知人命とある伊香津臣命是也荒木田系図の世系も之に異なる事なし上件の書とも合せ考えて伊香具神は伊香津臣命を祭れること明らかなり(西川丈雄、五二五頁)

『近江伊香郡志』(前略)伊香刀美とは、天兒屋根命四世の孫に御食津臣命ありて、其の子の伊香津臣人と同人なり、また其の子恵伊美志留はまた意美志留とも書かれ巨知人命と言わるゝ人に当り新撰姓氏録、左京神別伊香連はこの人より出づるとされ、天兒屋根命十世の孫と記さる。伊香刀美との関係上世代に相違あれども、一地方に残されたる口碑として世代の差異の如き深く咎むるに足らざるべし、而して其の弟、那志等美は藤原系図に梨迹臣命と見え、天兒屋根命九世と数えられし人なり。更にまた左京神別中なる中臣酒人宿禰の祖狹山命は、伊香津臣命の子なる事も藤原系図に明記さるゝ所なれば、これより推して、帝王編年記所収の古老伝には、多少の歴史的要素ありとなす所以なり。(後略)(西川丈雄、五二五～五二六頁)

『近江輿地志略』伊香津臣命を祭神と考定し、「上代此地に湖水あり田里未だ開けざるの時命此地に來りて、子孫に告げて曰く、吾此処に止りて永く末代を守るべしと」(西川丈雄、五二六頁)

なお、近江国の式内社百五十五座(大十三座・小百四十二座)のうち、伊香郡に四十六座が集中して注目されるが、これは一般に、当地が藤原(中臣)氏系の伊香連の本貫地であったことによるものと解されている。また、当地の南方に東物部・西物部の地が残ること、郡名が物部氏の祖「伊香色雄」「伊香色謎」に通ずることなどかれ、物部氏の影響を加味する説もある。ちなみに、太

田亮は伊香連について、「この氏は中臣氏族なるが如きも、物部氏に伊香色雄、伊香色謎兄弟あり、並に此地名を負ひし人なるのみならず、付近に物部邑現存し、伊香色雄の子大新河、建新河、大水口、安毛建彦等皆近江の地名を負ひしなれば、伊香氏最初は物部氏たりしならんかと考へらる」(『姓氏家系大事典』)と述べ、また吉田東伍は、物部氏は伊香色雄を祖として『和名抄』の河内国茨田郡伊香郷(現枚方市伊加賀町)に起こり、その分流が当地に移って「物部」や「伊香」の地名を残したものとみる(『大日本地名辞書』)。(西川文雄、五二六～五二七頁)

鶏足寺 古橋 己高山仏教圏と称される五寺の主院。真言宗豊山派に属し、神亀元年(七二四)行基の開基。延暦一八年(七九九)伝教大師の再興という。海拔九二三メートルの己高山頂近くに堂宇僧坊を配備し、江戸末期に至るまで領主の保護を受けたが、しだいに衰退し、現在は一字も残っていない。本尊十一面観音は他の五寺関係とともに、与志漏神社に隣接して収蔵庫己高閣が設置され保存されている。鶏足寺は伊香郡三十三所第十二番の札所である。(今井清右エ門、二二二頁)

西浅井町

塩津

町の東部、塩津湾奥に明治二二年(昭和三〇年)一八八九～一九五五まで成立した旧村名。滋賀・福井県境の野坂山地より南にのびる日計山系・行市山系の二つの地塁山地の間の断層谷に立地する九集落よりなる。中央部を南北に古来、敦賀と琵琶湖水運を結んだ主要道塩津街道が走り、とくに塩津湾に臨む塩津浜は『延喜式』に北陸の物産の經由地と記された要港で、海津・大浦とともに湖北三浦として栄えた。塩津川東岸の街村状町並や集落北口の街道常夜灯(天保五年(一八三四)建立)に当時の面影を残している。深坂越・新道野越の峠下集落である沓掛にも問屋・倉庫跡の礎石や石垣が残っている。塩津中の香取神社は、海路の守護神経津主神をまつり近在はもとより琵琶湖岸の村々より崇拜されてきた。(北川貢造、三三〇頁)

琵琶湖の北部、沈水地形の塩津湾の湾奥に位置する。地名は北陸の海塩を大津に運送する港であつたことに由来する。(角川、二五三～二五四頁)

塩津越 琵琶湖最北端の塩津と越前敦賀を結ぶ古道。塩津街道とも呼ぶ。古代には、越前以北の北陸道諸国から都へ送られる貢納物は、敦賀に陸揚げされ、陸路で塩津まで運ばれ、塩津から大津まで琵琶湖水路を利用し、大津から再び陸路で都へ運ばれる規定になっていた。塩津―敦賀間は直線距離一八kmで、湖北と若狭湾を結ぶ最短ルートであり、海津と敦賀を結ぶ西近江路の七里半越にたいして、五里半越と呼ばれたが、途中標高三七〇mの深坂峠を越えるのが、急坂で難所

であった。そのため、のちに、信長・秀吉によってこの難所を避けて、深坂峠の東側を迂回する新道野越の道が開かれる。以後、この新道野越が主道になる。なお、この塩津越に運河を開き、若狭湾と琵琶湖。さらには都や伊勢湾と結ぼうとする計画はきわめて古くからあり、たとえば平重盛がその事業に着手して、しかし大石のため断念したと伝えられる深坂峠手前の地点に、掘止地蔵と呼ばれる地蔵が建っていたりして、古人の願望を伝えている。(足利健亮、三三〇～三三一頁)

高島郡

高島町白鬚神社鵜川(橋本鉄男、三四八～三五三頁)

比良山系の北端が琵琶湖にその断層崖をしずめるようにした白砂の汀の景勝地に陳座し、全国的な分布をみせる白鬚(髭)神社の本社とされている。『三代実録』の貞観七年(八六五)正月十八日の条に「近江国の無位の比良神に従四位下を授く」とあるが、当社の祭神猿田彦命はこの「比良神」にあたるという。

社名の「白鬚」は一般にシラヒゲと呼ばれるが、それに異をとなえる説がある。言語学的な考証を抜きにして結論だけをいえば、「白鬚」(はくしゅ)は「百済」(ひやくさい)であり、その百済もまた仮借字で、本義はクナルすなわち「大国」を意味するというのである。いうまでもなく、この説は白鬚神社を渡来神とみる。

現在白鬚神社が最も濃密に分布するのは旧武蔵国北部である。武蔵国は天武天皇十三年(六八五)五月、百済の僧尼と俗人男女が移住し、次いで多くの高句麗人を迎えて高麗郡ができ、さらに新羅人の拓殖があつて新羅郡すなわち後の新座郡が設けられた。そして白鬚神を高麗王とする口碑などもあるが、少なくとも、高麗王若光のような特定個人が白鬚信仰そのものの対象であるとは思えない。しかし武蔵について白鬚社の多い近江や築前はいうまでもなく、白鬚神を客人明神とした安芸も、文献上では武蔵国同様に、渡来人の拓殖した地方であつたことは確かであり(中島理一郎「白鬚考」『日本地名学研究』所収)、とくに近江の白鬚神の場合には、その歴史的背景として日本海側からの大陸文化の進入ルートが考えられるかにみえる(影山春樹『近江文化財散歩』)。

一方、白鬚神の前身が比良神(比良山の神)であつたことを示唆する伝承が古くからある。それは十世紀末から十一世紀初めにかけて、『三宝絵』『東大寺要録』『今昔物語集』などを経てしだいに形成された東大寺縁起とでもいうべきものにもとづく伝承とおもわれる。保延六年(一一四〇)

の『七大寺巡礼私記』古老田からの引用と思われる十四世紀の鱗関師練の『元享釈書』寺像志に、次のような説話が載っている。

略 参照…阿部泰郎「比良山系をめぐる宗教史的考察」『比良山系における山岳宗教調査報告書』所収)

○高島郡音羽村(三二一～三二二頁)

○長谷寺 音羽村の上の山にあり。白蓮山長谷寺と号す。縁起略に曰、聖武天皇の御宇近江国高島郡音羽村三尾山に十余丈の楠あり。常に光を放ち白蓮花を生ず。或時野火枝を焼、激浪根を洗ひ、自湖上に流れ出で、志賀郡大津浦に漂泊する事年久く、然養老四年(七二〇)此木を以て大和国高市郡八木の里に移す。徳道上人草庵を泊瀬山の東の峯に結こと十五年、此木を以て十一面の尊容を造らんと欲す。神亀四年(七二七)四月八日観音地藏示現して其功成就す。末木の二尊は大和国泊瀬寺、讃岐国志度寺の二尊是也。元木の一尊は是則当寺に安置すと云云。【観音霊場記】に、菅原氏の縁起略説を引曰、和州城上郡長谷寺の本尊十一面観音。御丈二丈六尺。開山徳道上人道明二人力を戮せて建立す。其像の財は江州高島郡三尾山より流出たる霹靂木なりと云云。臣按ずるに【釈日本記】に安芸国に一木あり。此木を伐らんとすれば霹靂す。河辺の臣怒て勅命を演ければ霹靂止たり。此木にて船を造る。是を霹靂木と云と記したり。【本草綱目】には霹靂木宸焼木雷の撃する所の木なりと記せり。例の仏氏其木を神にせんとて、霹靂の名を記せると見へたり。尋常の楠木成べし。(蘆田、六三二頁)

○観音堂 長谷寺に在。当寺の本尊なり。麓より十八町登りて此堂あり。土俗嶽の観音といふは是也。大和初瀬の観音・讃州志度寺の観音、一木にて造ると云事は詳らかに長谷寺の縁起、及志度寺の縁起に見へたり。別当を明王院と号す。三宝院派の山伏にて。音羽に住す。即当山は古歌に詠せる所の三尾山なりといふ。(蘆田、六三二頁)

○天満天神社 五十川村に在。祭祀毎年四月初申の日。(蘆田、六三三六頁)

○貝津東町村(高島郡マキノ町)西浜村の東にあり。或は海津又は粥津の文字に作る。越前敦賀より此処まで七里半あり。陸地をへて此地に荷物を出し、此所より船に積て大津に出す。(蘆田、六三三二頁)

○天満天神社 貝津上尾山(高島郡マキノ町)に在。祭る所天満天神菅公の霊也。(本ノママ)建久二年(一一九一)三月十五日社領十石御朱印あり。大蔭軍家光公御寄付也。祠官藤田和泉代々勤之。

京都府

熊野 げに恐ろしやこの道は、冥途に通へなるものを、心ぼそ鳥部山。(野上、三一二頁)

六道の辻 京都市東山区 (駒、一二六―二八頁)

(珍皇寺) ひっそりと本堂の扉を閉めて、人の気配も感じられないような寺だが、八月八日から十日までの三日間、いわゆる「六道詣」の参詣人で、狭い境内は身動きできないほどの混雑を見せる。

寺の門前付近はむかしから六道の辻と呼んで、冥界へはいって行く通路があるといわれてきた。六道詣の三日間は、門前の松原通にずらりと露店が立つ。ふつうの縁日と変わらない店に混じって、盆のしたくの仏具などを並べる店があり、幽霊館の店も出る。

松原通のこのあたりは、鳥辺野につづく葬りの地で、江戸時代までは、民家がきれると墓地が多く、明治の末ころになっても、通りに面した家々の裏には竹藪がひろがっていた。幽霊館は、西陣や伏見にも似たような話が伝わっているが、舞台としてはこのあたりがいちばんしっくりしているように思える(二八九ページ「館かい幽霊」)。

館かい幽霊(中川正文、一八九―一九六頁)

(要約) 鳥辺野の近くに一軒の館屋があり、水飴を作って売っていた。ある夜更けに一人の女が三文で飴を買った。しかし、翌日それは木の葉三枚に変わっていた。次の晩も女は飴を買いに来たが主人は断ることもできず、木の葉三枚で飴を売った。このようことが続き、主人は寝込んでしまったが、ある夜、近所の者がその女の後をつけた。女は鳥辺野の墓と墓の間にその姿を消した。その話を聞いた寺の和尚はその墓を確かめに行った。すると墓の中から、赤坊が泣声が聞こえた。新しい盛土の下に若い女の死骸の上で、かわいい赤ん坊が飴をしゃぶりながら泣いていた。女は墓の中で出生した子どものために、夜毎飴を買いにきていたのだ。その赤ん坊は、和尚のもとにひきとられ、修学の甲斐があり、高德の僧になり、また、館屋は「幽霊館」と名づけられ、繁盛したが、今ではその店の所在はわからなくなった。ただ、お盆の精霊迎えの日、京都、六道の辻、珍皇寺の門前に、一日だけ「幽霊館」の店がでるとのことである。この伝説は鳥辺野のほかに西陣でも伝えられている。

奈具社(秋本、四六八―四六九頁)

丹後国風土記曰 丹後国丹波郡々家西北隅方 有比治里 此里比治山頂有井 其名云真奈井 今既成沼 此井天女八人 降来浴水 于時 有老夫婦 其名曰和奈佐老夫和奈佐老婦 此老等至此井 而竊取

藏天女一人衣裳 即有衣裳者 皆天飛上 但无衣裳女娘一人留 即身隱水而 独懷愧居 爰老夫謂天女曰 吾無児 請天女娘 汝為児(天女答曰 妾独留人間 何敢不從 請許衣裳 老夫曰 天女娘 何存欺心 天女云 凡天人之志 以信為本 何多疑心 不許衣裳 老夫答曰 多疑无信 率土之常 故以此心 為不許耳 遂許) 即相副而往宅 即相住十余歲 爰天女 善為釀酒 飲一坏 吉万病除之 其一坏之直財積 車送之于時其家豐 土形富 故云土形里 此自中間 至于今時 便云比治里 後老夫婦等 謂天女曰 汝非吾児 斬足借住耳 宜早出去 於是 天女 仰天哭慟俯地哀吟 即謂老夫等曰 妾非以私意來 是老夫等所願 何爰獻惡之心 絹犬惡之心 忽存出去之痛 老夫增發願去 天女流淚 微退門外 謂鄉人曰 久沈人間 不得還天 復無親故 不知由所居 吾何々哉々 拭淚嗟嘆 仰天哥曰 阿麻能波良 布理佐兼 美礼婆 加須美多智 伊幣治麻土比天 由久幣志良受母 遂退去而 至荒塩村 即謂村人等云 思老老夫婦之意 我心无異荒塩者 仍云比治里荒塩村 亦至丹波里哭木村 抛槻木而哭 故云哭木村 復至竹野郡船木里奈具村 即謂村人等云 此処我心成奈具志久 へ古事平善者云奈具志 乃留居此村 斯所謂竹野郡奈具社坐 豐宇賀能壳命也

岡山県

徳島県

阿南市

『燈下録』卷之十(新編阿波叢書、四三三〜四三四頁)

一眼魚の池

福村と云所にあり(黒津地浦に属す)西の方三峯の谷を受け、そのめぐり三十丁ばかりの大なる池なり、中に岩石あり、水上高さ一丈めぐり九丈ばかりに扁じ、是を蛇の枕となづく、さていかなる故にや、此の池にすむ鯉鮒を始め、いと小さき名も知らぬ雑魚まで悉皆一眼のみ生ず、両眼のもの曾てなしとぞ(蓮多く布有)て花の頃山上より臨み見れば、涼風に匂へる雲(雪)のむらきえかと疑はる、到景賞すべし)

此の所の云ひ伝に、古昔此地に大蛇の住けるを月ノ輪矢部殿とて(時代、何人を知らず)いませしか(今屋敷跡とて四反計の土地焼土となりて黒くもの生へず、是を河原やしきといふ)ゆえこそあらめねらひ寄て射たまひし其の矢おろちの左の眼より頭をなかば碎きけり、一眼の苦痛に堪へずして終に数多矢負ひて池中の岩上にもだへ死す、其のうらみのいと深くてもものゝ怪となりつゝ月輪殿一家を残りなくとこひ(咀)尽して猶あかずありけん、汝が一眼の恨をおほせて今にかく諸魚ことごとく一眼なりとなん云へり。

因に云、摂津国昆陽(コヤ)池に住む鮒十に一二は一目なりとぞ、伝へいふ。聖武の御宇、僧正行基此の池のほとりを往来し給ふに、乞食の病者が願をうべなひ有馬の温泉に入浴せしめ給ふ、又病者魚を喰むことを欲す、僧正みずから昆陽の池に至り買来てあぶりて喰はしむ。頓て此の病者仏体と変じ我なん温泉の山の薬師なりと宣ひて紫雲に乘じ飛去り給ひぬ、其の時彼の病夫の喰ひ残れる魚を昆陽の池に放ち給ふに、忽ち蘇りて焦げざる方一目となりしなん、其余種とて今にたへず交り生ずと云り。

御池の片目魚『富岡町志』 伝説(富岡町、一二三〜一二四頁)

(札幌大学教養部教授)

《年表》

六六五年頃(ママ) 孝徳天皇勅使を遣し菅山寺を検分される

七六四 天平宝字八 孝謙天皇の勅を受け高僧照檀上人当山(現・菅山寺)に坊舎建立、不動明王(平安時代の

作ママ)を安置し、龍頭山大箕寺を開山す

八五〇 嘉祥三 菅原道真当山に入り長老尊元和尚に師事

八五五 斉衡二年十一才で下山、菅原は善卿に伴われ上京

詩を作る。

八六六 貞観 八(三二才)民部少輔に任ぜられたお礼に熊野詣へたった。紀ノ川の渡で犬を預ける。(犬島

の由来(ぎょうせい、一〇一〇四頁)

左中弁菅原道真公ヲ以テ遣唐使ソス

八七〇 貞観一二 都良香の前で弓の腕を披露

八八九 寛平元年勅使として再び龍頭山に入り三院四十九坊を建立し、本尊不動明王の他に五知如来、無量

寿如来を安置し、寺号を大箕山菅山寺と改め中興した

九〇一 昌泰四年一月 大宰府権帥

天満大自在天神

九〇三 延喜三 二月二五日 太宰府榎寺で没

九〇五 味酒安行 太宰府 道真墓に廟社を築く

九〇九 九 藤原時平没

九二三 二三 四月 道真右大臣 正二位 大宰府配流の宣旨焼却

九三〇 延長八年六月二六日 清涼殿被雷

九四二 天慶五年 右京七条の多治比文子に神託あり「右近馬場に住まんと欲す」と告げられ、

家の側に瑞籬を樹てて祀っていた。

九四七 天曆元年

託宣により都で道真祭られる

近江国比良の祀官神良種の子 太郎丸という小童に神託あり「我在世の時、夢に松樹吾が身に生じ、またその折れたるを見たり、これによりて後に大臣に昇りしも、また、左遷の悲しみに逢えり、ゆえにわが宿るところは必ず松樹を植うべしと宣いしが、やがて一夜のうちに松数千本、きたの右近馬場に生い出た。ここにおいて神良種は先

の多治比文子、および北野にその頃ありし朝日寺の僧にて最珍というものとともに謀りて、その年の六月神殿を造り奉ったという。

北野に社建立

九月九日 道明寺に社を建て森の内に梅松を植えて神木とし、天満大自在天神と崇め奉える。

一二四三 寛元元年 後嵯峨天皇妃 陰明門院仏道に帰依し、菅山寺で大乘経の写経や詩歌を詠じる日々を

すごした、九月当山で薨去

一二六四 文永二年 菅山寺大僧都専曉 修業のため渡宗

一二七五 建治元年専曉宗版一切経七千余巻を持ち帰山

一二七七 建治三 菅山寺一山衆徒梵鐘寄進

一四八二 文明一四 八月二十九日夜 兼豪僧都 夢に北野天神の吾好む事ありとて歌を示す。

聞度ハ例時懺法不断香鞠ケル音ニシク物ゾナキ

一五六〇 永祿三年正月 大友宗麟 大分吉野原天満の枝を折らせる。(ぎょうせい、九一五二頁)

一六一四 慶長一九 徳川家康菅山寺の一切経を江戸増上寺に移す 明治初年 寺領国有化

《文献》

青木和夫、一九八〇、「息長氏」、国史大事典二。

青森県、一九八一、「青森県百科事典」、東奥日報社。

秋本吉郎・校注、一九六六(八刷)、『風土記』、岩波書店。

足利健亮、一九八四、「塩津越」、↓滋賀県百科事典刊行会。

蘆田伊人『大日本地誌大系』大日本地誌大系刊行会。

三一九二五「近江国輿地志略」上。

六一九二五「近江国輿地志略」下。

八一九二六「三國地志」上。

網野善彦、大西廣、佐竹明宏・編、一九九〇(二刷)、『瓜と龍蛇』、福音館書店。

荒川法勝、一九七六、「房総伝説十選」、↓高橋在久・荒川法勝。

伊川公司、一九七六、『阿南の伝説』、小山助学館(徳島市)。

- 石丸正運、一九八四、『天神社板絵著色絵馬』、↓滋賀県百科事典刊行会。
- 井戸庄三、一九八四、『伊香郡』、↓滋賀県百科事典刊行会。
- 伊藤清司・編、一九九〇、『ふるさとの伝説』八、ぎょうせい。
- 稲田浩二、立石憲利・編、一九七四、『中国山地の昔話』、三省堂。
- 今井清右エ門、一九八四、『伊香具神社』、『鶏頭寺』、『菅山寺』、↓滋賀県百科事典刊行会。
- 井本農一、弥吉菅一、横澤三郎、尾形 仂・校注、一九六九(三版)、『校本 芭蕉全集』、六「紀行、日記篇、俳文篇」、角川書店。
- 内田武志、宮本常一・編、一九七二、『菅江真澄全集』三、未来社。
- 梅木秀徳、一九八〇、『大分の伝説散歩』、↓梅木秀徳、他。
- 梅木秀徳・辺見じゅん、一九八〇、『大分の伝説』、角川書店。
- 梅田義彦・編、一九七二、『新訂増補 大日本神名辞書』、堀書店。
- 梅原達治
- 一一九八九、『松浦武四郎「聖蹟二十五霊社順拝双六」』、『りべらる・あーつ』一。
- 一一九九〇、『御袖天満宮』、『りべらる・あーつ』二。
- 三一九九〇、『滝宮天神』、『りべらる・あーつ』三。
- 江竜喜之、一九八六、『伊夫岐神社』、↓谷川健一五。
- 大島広志・編、一九九〇、『ふるさとの伝説』九、ぎょうせい。
- 岡山県史編纂委員会・編、『岡山県史』、岡山県。
- 一六一九八三 民俗 二。
- 岡田米夫、一九七七、『神社』、近藤出版社。
- 小栗栖健治、一九八六、『天満宮』、↓谷川、五。
- 尾道民話伝説研究会・編、一九八四、『尾道の民話・伝説』、同会。
- 影山春樹
- 一一九七二、『近江文化財散歩』、学生社。
- 一一九七九(二版二刷)、『伊香具神社』、↓國史大事典編集委員会。
- 笠井藍水、一九六三、『阿南市郷土概説 富岡付近郷土資料』、阿南市市史編纂室所蔵。
- 笠松彬雄・他、一九七五、『日本民俗誌大系』四、角川書店。
- 『角川日本地名大辞典』編纂委員会、竹内理三・編、『角川日本地名大辞典』、角川書店。
- 一二二 一九八二、『静岡県』。
- 二五 一九七九、『滋賀県』。
- 金岡秀友・編、一九七一、『古寺名刹大事典』、東京堂書店。
- 鎌田 栄、一九 、『讃岐に於ける菅公』、発行所不明。
- 刈屋栄昌、一九八八(復刻)、『牛窓風土物語』、発行所不明。

河原喜久男、一九八四、「海津天神社」↓滋賀県百科辞典刊行会。

北川貢造、一九八四、「塩津」↓滋賀県百科辞典刊行会。

木村至宏、一九八四、「相応」↓滋賀県百科辞典刊行会。

ぎょうせい、「ふるさとの伝説」、ぎょうせい。

一 一九八九(再版)、愛・悲恋。

三 一九八九、幽霊・怨霊。

金田一京助、一九八三、「求婚伝説より羽衣・三輪山伝説へ」↓日本文学研究資料刊行会。

久保田弥一郎、一九八四、「北野寺」↓滋賀県百科辞典刊行会。

黒板勝美、国史大系編修会・編、「新訂増補 国史大系」、吉川弘文館。

一 上 一九六六、「日本書紀」前篇。

一二 一九六五、「扶桑略記・帝王編年記」。

香西記を読む会・編、一九九〇、「香西記」(読み下し)、高松市歴史民俗協会、高松市文化財保護協会。

国史大事典編集委員会・編、「国史大事典」、吉川弘文館。

一 一九七九(二版二刷)。

二 一九八〇。

国民図書・編、一九七六、「校註国歌大系」一三、講談社。

駒敏郎

一 一九八〇、「若狭・越前伝説散歩」、↓駒敏郎、花岡大学

二 一九七七、「近江伝説散歩」、↓駒敏郎、中川正文二

三 一九七六(三版)、「京都伝説散歩」、↓駒敏郎・中川正文一

駒敏郎、中川正久

一 一九七七、「近江の伝説」、角川書店。

二 一九七六(三版)、「京都の伝説」、角川書店。

駒敏郎・花岡大学、一九八〇、「若狭・越前の伝説」、角川書店。

佐伯有清、一九五八、「8・9世紀の交における民間信仰の史的考察」、「歴史学研究」二二四号。

坂本賞三、一九七九(二版二刷)↓国史大事典編集委員会。

山陽日日新聞社・編、一九六九、「尾道の宮」、同社。

滋賀県百科事典刊行会・編、一九八四、「滋賀県百科事典」、大和書店。

静岡県高等学校社会科学教育研究協議会、一九七八、「静岡県の歴史散歩」、山川出版社。

静岡新聞社出版局・編、一九七八、「静岡大百科事典」、静岡新聞社。

篠村正雄、一九八一、「法眼寺」、↓青森県。

下坂守、一九八六、「北野天満宮」、↓谷川健一、五。

白崎金三、一九八四、「菅山寺と菅原道真」、↓滋賀県百科事典刊行会。

新編阿波叢書編集委員会・編、一九七六、「新編阿波叢書」上、歴史図書社。

高橋在久、一九七六、「房総伝説散歩」、↓高橋在久・荒川法勝。

高橋在久・荒川法勝、一九七六、「房総の伝説」、角川書店。

関敬吾、「日本昔話大成」、角川書店。

二一九七八

高倉新一郎、一九三五、「十勝大津村行」、「北海道倶楽部」、昭和一〇年二月号。

高崎正秀、「高崎正秀著作集」、桜楓社。

七一九七一、「金太郎誕生譚」。

一、一九六二(二版)、「古典と民俗学」、塙書房。

高田衛、阿部真司・校註、一九七八、「本朝怪談故事」校註索引、伝統と現代社。

武田静澄、一九七八、「静岡伝説散歩」↓武田静澄、吉田知子。

武田静澄、吉田知子、一九七八、「静岡の伝説」、角川書店。

谷川健一、「日本の神々」、白水社。

五一九八六、「山城・近江」。

土井通弘、一九八四、「天神社紙本墨書法華経」、↓滋賀県百科事典刊行会。

東洋大学民俗研究会・編、一九七〇、「余呉の民俗」、同会。

都窪郡教育会、一九二三、「都窪郡誌」、同会(岡山県)。

富岡小学校PTA読書部・編、一九八四、「富岡のむかし話」、富岡小学校(徳島県阿南市)。

富岡町・編、一九二五、「富岡町志」、同町(徳島県那賀郡、現・阿南市)。

中川正文、一九七六(三版)、「京都伝説十選」、↓駒敏郎・中川正久一。

中島悦次、一九八三、「竹取物語と羽衣伝説」↓日本文学研究資料刊行会。

中山太郎

一 一九七六、「日本民俗学」一 神事篇、大和書房。(3)

二 一九八七(合本復刊)、「日本民俗学辞典」、パルトス社。

名取武光

一 一九三四、「アイヌの貞操観と羽衣伝説」、「北海道倶楽部」、七、八。

二 一九七四、「アイヌの貞操観」、「アイヌと考古学」二、北海道出版企画センター。

新関淑郎、一九九〇、「蕉門路通と余呉湖の句」、滋賀県伊香郡余呉町教育委員会(編集・発行)。

西川文雄、一九八六、「伊香具神社」、「鉛練比古神社」、↓谷川健一五。

西田直二郎、一九八六(二版)、「菅公と天満宮」、村山修一・編、「天神信仰」、雄山閣。

西田長男、一九八六(二版)、「北野天満宮の創建」、村山修一・編、「天神信仰」、雄山閣。

日本文学資料刊行会・編、一九八三、『日本の古典と口承文芸』、有精堂。
野上豊一郎・編、『解註 謡曲全集』、中央公論社。

二一九八四(再版)。

三一九八四。

野本寛一、一九七八、『羽衣伝説』↓静岡新聞社。

俳句の里 つるが編集委員会・編、一九八四、『俳句の里 つるが』、敦賀市文化協会。

橋本鉄男

一九七二、『日本の民俗 滋賀』、第一法規。

二一九八二、『地名と民俗 ― 湖西の産鉄伝承』、『地理』二七・七、臨時増刊『地名の世界』。

三一九八六、『白鬚神社』、↓谷川 五。

長谷川 政春、他・校注、一九八九、『土佐日記 蜻蛉日記 紫式部日記 更級日記』、岩波書店。

長谷川 嘉和、一九八四、『上叡天満宮講踊』、↓滋賀県百科。

花岡大学、一九八〇、『若狭・越前伝説十一選』↓駒 敏郎、花岡大学。

林 英夫・編、一九八一、『日本名所風俗図会』一七、諸国の巻 II、角川書店。

林屋 辰三郎、一九六四、『古典文化の創造』、東京大学出版会。

原田敏丸、渡辺守順、一九七二、『滋賀県の歴史』、山川出版社。

福田 晃・編

一九八七、伊藤曙覧・藤島秀隆・松本孝三・著、『日本伝説大系』六「北陸編」、みずうみ書房。

二一九八九、『民間説話』、世界思想社。

平凡社、『日本歴史地名大系』、平凡社。

二六一九八一、『京都府の地名』。

辺見じゅん・佛坂勝男・宮地武彦、一九七九、『佐賀の伝説』、角川書店。

松原秀明、一九八一、『日本名所風俗図会』一四、四国の巻、角川書店。

三品彰英、『三品彰英論文集』、平凡社。

四一九七五(二刷)、『増補 日鮮神話伝説の研究』。

三田村 耕治、一九七五、『滋賀県長浜昔話集』、↓笠松他。

南 信一、一九七八、『羽衣』↓静岡新聞社。

宮尾しげを、一九六九(再版)、『諸国祭礼行脚』、修道社。

宮地武彦・佛坂勝男、一九七九、『佐賀伝説散歩』、↓辺見じゅん、他。

百田弥栄子、一九八九、『鶏身の雷神から観音への展開』↓福田 晃。

柳田國男、『定本 柳田國男集』、筑摩書房。

一九六七(七刷)。

五 一九六七(九刷)。

山尾幸久、一九八四、「息長族」、↓滋賀県百科。

山本四郎、『京都府の歴史散歩』、山川出版社。

上 一九七五。

下 一九七七(二版三刷)。

余吾町教育委員会・編、一九八〇、『余吾の民話』、同町教委。

余呉町教育委員会、余呉町文化財専門委員会・編、一九八三、『余呉町の文化財』、同町教育委員会。

吉岡 曠・校注、一九八九、「更級日記」↓長谷川 政春、他。

吉田常吉、一九八〇、『国史辞典』二

吉田東伍、一九七〇、『増補大日本地名辞書』、富山房。

二『畿内』。

三『中国・四国』。

若尾五雄(森栗茂一・編)、一九八九、『物質民俗学の視点』、現代創造社。

鷺尾順敬、一九八二(増訂六刷)、『日本佛家人名辞書』、東京美術。